

貝野瀬堀ノ内遺跡

# 貝野瀬堀ノ内遺跡

(一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備社会資本総合整備  
(防災・安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



（一）沼田赤城線（貝野瀬工区）歩道整備社会資本総合整備  
（防災・安全）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

○  
一  
一  
一

2022

群馬県沼田土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県沼田土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 貝野瀬堀ノ内遺跡

(一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備社会資本総合整備  
(防災・安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2022

群馬県沼田土木事務所  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 序

群馬県の利根沼田地域は、新幹線や高速道路などの高速交通網も整備され、東京から近距離にあって、尾瀬に代表される3つの国立公園や谷川岳など数多くの山々、利根川の清流など魅力的な大自然や、温泉、スキーチャンスなど豊富な観光資源に恵まれ、多くの観光客が訪れております。

そのような状況に鑑みて、住民の利便性や観光客の周遊性の向上に資する地域間連携の強化を図るために取組が求められる中、通学路の歩道整備率が県内の他地域に比べ低いことから、群馬県では歩行者や自転車の安全な通行を確保するため、平成23年度から令和4年度の9年間にわたりて一般県道沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備事業を実施することとなりました。

工事対象地には埋蔵文化財の包蔵が認められたため、工事に先立って埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることとなり、令和3年度に当事業団が発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代中・後期の土坑、古墳時代後期の竪穴建物や井戸・土坑などの遺構と土器等の遺物が発見され、令和4年度に発掘調査の成果をまとめる整理作業を実施し、このほど発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

発掘調査から報告書の刊行に至るまでは、群馬県県土整備部、群馬県沼田土木事務所、群馬県地域創生部文化財保護課、群馬県教育委員会、昭和村教育委員会、地元関係者の方々には、多大なるご支援とご協力を賜りました。ここに厚く御礼を申し上げますとともに、本書が地域における歴史の解明と、豊かな地域社会の形成に役立てられますことを願いまして、序といたします。

令和4年8月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
理 事 長 向 田 忠 正



## 例　　言

1. 本書は、(一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備社会資本総合整備(防災・安全)事業に伴って発掘調査された貝野瀬堀ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は、群馬県利根郡昭和村大字貝野瀬字堀ノ内267-1、267-4、268-1、320-1、321-1、322-1、324-1、324-3、324-4、325-1、326-1、327-1、327-5に所在する。
3. 調査対象面積は787.33m<sup>2</sup>である。
4. 事業主体は群馬県沼田土木事務所である。
5. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
6. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和2年度社会資本総合整備(防災・安全)(交安・重点) (一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備事業

履行期間：令和3年6月1日～令和3年9月30日

調査期間：令和3年7月1日～令和3年7月31日

調査担当：田村　眞(主任調査研究員)、木村　収(専門調査役)

遺跡掘削工事請負：技研コンサル株式会社

地上測量委託：アコン測量設計株式会社

7. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。

名　　称：令和3年度(一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備社会資本総合整備(防災・安全)事業

履行期間：令和4年4月1日～令和4年8月31日

整理期間：令和4年4月1日～令和4年6月30日

整理担当：高島英之(専門員(総括))

8. 本書作成担当は次のとおりである。

編集・本文執筆：　　高島英之(専門員(総括))

遺物観察：土師器・須恵器　神谷佳明(専門調査役)

縄文土器　　橋本　淳(主任調査研究員・資料統括)

石器・石製品　岩崎泰一(専門調査役)

金属製品　　板垣泰之(専門員(主任))

デジタル編集：　　齊田智彦(主任調査研究員)

遺物写真撮影：土師器・須恵器、縄文土器、石器・石製品　　高島英之

金属製品　　板垣泰之

遺物保存処理：　　板垣泰之、閔　邦一(専門調査役)

9. 出土遺物および写真・図面等記録類は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。

10. 発掘調査および報告書作成には、次の関係機関にご助言をいただいた。

群馬県県土整備部、群馬県地域創生部、群馬県沼田土木事務所、群馬県教育委員会、昭和村教育委員会

## 凡　例

1. 本報告書に用いた遺構名称は、発掘調査時の名称を踏襲したが、整理作業の過程で変更したものもある。
2. 本報告書に用いた座標・方位は、すべて国家座標第IX系(世界測地系)による。主軸方位等の計算にもこれを用いた。
3. 本報告書の遺構図版縮尺は以下の通り。ただし、遺構によってはこの限りではない。  
遺構平面図・断面図 竪穴建物1/60、竪穴建物竈1/30、土坑・ピット・集石1/40
4. 本報告書の遺物図版縮尺は以下の通り。ただし、遺物によってはこの限りではない。  
土師器、須恵器、縄文土器、石器・石製品、金属製品1/3
5. 本報告書中のスクリーントーン表現・記号は以下の通り。  
遺構：焼土 粘土 灰 捜乱 遺物：ガラス質  
● 土器 ■ 鉄・金属製品
6. 本報告書中の遺構断面図の標高値は、原則として断面図下に「L=○○m」のように表記した。
7. 本報告書における土層断面図及び遺物観察表に記した色調表現は、農林水産省水産技術事務局・財團法人日本色彩研究所色票監修1988『新版標準土色帳』によった。
8. 本報告書におけるテフラ(火山噴出物)の略号は以下の通り(テフラの名称は町田洋・新井房夫1992『火山灰アトラス』東京大学出版会などによる)。  
As-B…浅間 B、Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保、MMF…前橋泥流堆積物、HMP…榛名三原田軽石、  
As-YPk…浅間草津黄色軽石、AT…姶良Tn

# 目 次

序  
例言  
凡例  
目次  
挿図・表・写真図版目次

第1章 調査に至る経緯、方法と経過 ······ 1	第2節 古墳時代後期の遺構と遺物 ······ 26
第1節 調査に至る経緯 ······ 1	1. 1号竪穴建物 ······ 26
第2節 発掘調査の方法 ······ 2	2. 2号土坑 ······ 30
1. 調査区と座標の設定 ······ 2	3. 3号土坑 ······ 30
2. 発掘調査の方法 ······ 4	4. 7号土坑 ······ 31
3. 遺構測量 ······ 4	5. 1号井戸 ······ 32
4. 遺構写真撮影 ······ 4	6. 1号ピット ······ 32
第3節 発掘調査の経過 ······ 4	7. 2号ピット ······ 33
第4節 整理作業の経過と方法 ······ 6	8. 3号ピット ······ 33
9. 4号ピット ······ 34	
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境 ······ 7	第3節 繩文時代の遺構と遺物 ······ 37
第1節 地理的環境 ······ 7	1. 4号土坑 ······ 37
1. 地勢 ······ 7	2. 5号土坑 ······ 38
2. 地形 ······ 7	3. 6号土坑 ······ 38
第2節 歴史的環境 ······ 8	4. 8号土坑 ······ 39
1. 旧石器時代 ······ 10	第4節 遺構外出土遺物 ······ 42
2. 繩文時代 ······ 10	1. 遺構外出土繩文土器 ······ 42
3. 弥生時代 ······ 10	2. 繩文土器以外の遺構外出土非掲載遺物 ······ 42
4. 古墳時代 ······ 10	
5. 奈良・平安時代 ······ 12	第4章 調査成果の整理とまとめ ······ 46
6. 中世 ······ 13	1. 中近世の遺構と遺物 ······ 46
7. 近世・近代 ······ 16	2. 古墳時代後期の遺構と遺物 ······ 46
第3節 基本上層 ······ 18	3. 繩文・弥生時代の遺構と遺物 ······ 47
第3章 発見された遺構と遺物 ······ 20	遺物観察表 ······ 48
第1節 中近世の遺構と遺物 ······ 20	写真図版
1. 1号土坑 ······ 20	報告書抄録
2. 1号集石 ······ 24	
3. 2号集石 ······ 25	

## 挿図目次

第1図 道路の位置	1
第2図 調査区設定図	3
第3図 周辺地形分類図	9
第4図 周辺遺跡分布図	14
第5図 基本上層図	19
第6図 1面全体図	21
第7図 1-A区1面全体図、1号土坑	24
第8図 2区1面全体図、1号集石	25
第9図 3-A区1面全体図、2号集石	26
第10図 1-B区1面全体図	27
第11図 1-B区1面1号堅穴建物	28
第12図 1-B区1面1号堅穴建物と出土遺物	29
第13図 1-B区1面2・3号土坑	30
第14図 4-A区1面全体図	31
第15図 4-A区1面7号土坑と出土遺物	32
第16図 4-A区1面1号井戸と出土遺物	33
第17図 1-A・B区1面1～4号ビット	34
第18図 2面全体図	35
第19図 3-A区2面全体図、4号土坑と出土遺物	37
第20図 3-A区2面5号土坑と出土遺物	38
第21図 4-A区2面全体図	39
第22図 4-A区2面6号土坑と出土遺物	40
第23図 4-A区2面8号土坑と出土遺物	41
第24図 道構外出土縄文土器(1)	43
第25図 道構外出土縄文土器(2)	44

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	15
第2表 検出道構一覧表	23
第3表 出土道構別縄文土器式内訳表	45
第4表 縄文土器以外の非掲載遺物の点数と重量	45
第5表 遺物観察表	48

## 写真目次

PL. 1	1. 調査区の路線周辺(北東から) 2. 調査区の路線周辺(南から)
PL. 2	1. 1-A区1面調査区全景(北から) 2. 1-A区1面1号土坑全景(西から) 3. 1-A区1面1号土坑断面(西から) 4. 2区1面調査区全景(南西から) 5. 2区1面1号集石全景(南から) 6. 2区1面1号集石全景(東から)
PL. 3	1. 3-A区1面調査区全景(北東から) 2. 3-A区1面2号集石全景(南東から) 3. 3-A区1面2号集石掘方全景(南東から) 4. 3-A区1面2号集石断面(南東から)
PL. 4	1. 1-B区1面調査区全景(北から) 2. 1-B区1面1号堅穴建物全景(北西から) 3. 1-B区1面1号堅穴建物A-A'断面(西から) 4. 1-B区1面1号堅穴建物電全景(北西から) 5. 1-B区1面1号堅穴建物電掘方全景(北西から) 6. 1-B区1面1号堅穴建物電B-B'断面(西から) 7. 1-B区1面1号堅穴建物電C-C'断面(北西から)
PL. 5	1. 1-B区1面2号土坑全景(東から) 2. 1-B区1面3号土坑全景(東から) 3. 4-A区1面調査区全景(北から) 4. 4-A区1面7号土坑全景(南から) 5. 4-A区1面7号土坑断面(北東から)
PL. 6	1. 4-A区1面1号井戸全景(南東から) 2. 4-A区1面1号井戸断面(北東から) 3. 1-A区1面1号ビット全景(西から) 4. 1-B区1面2～4号ビット全景(北東から) 5. 1-B区1面2号ビット全景(北東から) 6. 1-B区1面2号ビット断面(北東から) 7. 1-B区1面3号ビット全景(北東から) 8. 1-B区1面3号ビット断面(北東から)
PL. 7	1. 1-B区1面4号ビット全景(北東から) 2. 1-B区1面4号ビット断面(北東から) 3. 1-C区1面調査区全景(南から) 4. 3-B区1面調査区全景(北東から) 5. 3-A区2面調査区全景(北東から)

Pl. 8

1. 3-A区2面調査区南西部(南西から)
2. 3-A区2面4号土坑全貌(南東から)
3. 3-A区2面4号土坑断面(南東から)
4. 3-A区2面5号土坑全貌(南東から)
5. 3-A区2面5号土坑断面(南東から)

Pl. 9

1. 4-A区2面調査区全景(南西から)
2. 4-A区2面6号土坑全貌(南西から)
3. 4-A区2面6号土坑断面(南西から)
4. 4-A区2面8号土坑全貌(北から)

Pl. 10

1. 2区2面調査区全景(北東から)

2. 3-B区2面調査区全景(北東から)

3. 4-B区2面調査区全景(南東から)

4. 1-A区基本土層(西から)

5. 1-C区基本土層(北から)

6. 2区基本土層(東から)

7. 3-B区基本土層(南東から)

8. 4-A区基本土層(南東から)

Pl. 11

- 1-B区1面1号竪穴建物、  
4-A区1面7号土坑・1号井戸、  
3-A区2面4・5号土坑出土遺物

Pl. 12

- 4-A区2面6・8号土坑出土遺物

Pl. 13

2. 3-A・B、4-A区道構外出土繩文土器

Pl. 14

- 4-A区道構外出土繩文土器



# 第1章 調査に至る経緯、方法と経過

## 第1節 調査に至る経緯

群馬県の利根沼田地域は、尾瀬に代表される3つの国立公園や谷川岳など8つの日本百名山、利根川などの豊かな自然環境に恵まれ、高原野菜の生産や観光農業が盛んな地域である。古くから温泉地が栄え、新幹線や高速道路などの高速交通網も整備され、年間1,100万人を超える人々を迎えている。とくに近年では、アウトドアスポーツの新しい観光スポットとしても注目されている。東京から近距離にあって、数多くの山々、清流など、魅力的な大自然や、温泉やスキー場、全国に誇れる道の駅「川場田園プラザ」など、豊富な観光資源に恵まれ、特に、みなかみ町においては、平成29(2017)年6月14日にユネスコエコパークに登録されるなど、豊かな自然環境を活用した地域の活性化が期待されている。

また、この地域は、水源地域として多くのダムにより水資源を蓄え、はぐくみ、守り、首都圏の経済や生活を支えて来た。

豊富な観光資源を活かした、更なる観光振興を促進するためにも、また、住民の利便性や観光客の周遊性の向上に資する、地域間連携の強化を図るためにも、様々な施策が求められるところであるが、この地域においては通学路の歩道整備率が県内の他地域に比べ低いことから、歩行者や自転車の安全な通行を確保するための取組が急務であり、群馬県では、歩行者や自転車の安全な通行を確保するため、国道120号の交差点改良や県道沼田赤城線の歩道整備等を推進することを、地域における課題を解決するための主要な施策の一つと位置付けた。「歩道が無いので歩くのが怖い、大型車両も通るので危険」、「通学路があるので、子どもが安全に歩けるようにして



第1図 遺跡の位置

(国土地理院1/200,000地勢図「高田」平成18年10月1日、「長野」平成24年5月1日、「日光」平成15年11月1日、「宇都宮」平成23年6月1日を加工)

ほしい」等の地域住民や地域の学校関係者らの強い要望を受けて、一般県道沼田赤城線（貝野瀬工区）歩道整備事業が行われることになったのである。

この歩道整備事業は、全体延長420m、道路幅9.50m、歩道幅2.50m、事業期間は平成26(2014)年度～令和4(2022)年度の9年間と計画されている。現在、歩道が無く、歩行者は路肩を歩くため、交通事故発生の虞れがあるところが、歩道を設置することで、歩行者の安全な通行空間が確保出来るようになるわけである。

事業を着手するに当たり、群馬県県土整備部（以下、県土整備部と言う）は群馬県地域創生部文化財保護課（以下、文化財保護課と言う）に対して、事業地における埋蔵文化財包蔵の有無について照会した。事業地は周知の埋蔵文化財包蔵地外であったが、周辺に、周知の埋蔵文化財包蔵地である滝久保遺跡（昭和村遺跡番号0012）が所在することから、県文化財保護課では、県土整備部に宛てて、事業地における埋蔵文化財包蔵の有無を調べるために試掘・確認調査の必要性と、試掘・確認調査の結果、埋蔵文化財の包蔵が確認された場合には、工事に先立って埋蔵文化財発掘調査が必要になる可能性が存在することを回答した。

群馬県沼田土木事務所（以下、沼田土木事務所と言う）は、令和2（2020）年6月9日付け沼土第36107-1号にて文化財保護課に対して、当該事業地における埋蔵文化財の試掘・確認調査を依頼、これを受けた文化財保護課では、令和2（2020）年6月23日、事業対象地576m<sup>2</sup>を対象に、埋蔵文化財の試掘・確認調査を実施した。試掘・確認調査は、遺構・遺物有無の確認、遺構検出面の認定のため、0.2m<sup>2</sup>のバックホールを使用し、幅約1mの試掘坑を5箇所設定して行った。各試掘坑では、平面及び土層断面観察を実施した。

事業地東側に設定した試掘坑からは礫や焼土が確認され、竪穴建物の龕である可能性が考えられた。さらにその下層からは縄文土器や土師器が出土する遺物包含層が確認された。事業地西端寄りに設定した試掘坑では、ローム上面において縄文土器が出土する土坑を確認した。事業地中央に設定した試掘坑からも縄文土器、土師器などの遺物の出土が認められた。

こうした試掘・確認調査の結果により、文化財保護課は、事業地において遺構・遺物が検出されたことから、

令和2年6月24日付け文財第706-7号にて、本調査が必要と判断し、沼田土木事務所宛に回答した。

これを受けて、令和2年7月1日付け昭教委発第44号にて新規遺跡の報告があり、文化財保護課は令和2年7月29日付け文財730-10号にて、文化財保護法第95条第1項の規定による周知の埋蔵文化財包蔵地として新規に決定したことを昭和村教育委員会（以下、昭和村教委と言う）教育長に通知した。

事業地では遺構・遺物が検出され、事業によって埋蔵文化財に破壊が及ぶことは明白であること、また、用地等の制約により、設計変更等による埋蔵文化財保護対応も不可能であることから、発掘調査を実施し、記録保存の措置を執ることが最も適切であるとの結論に至り、発掘調査の実施に向けて、県土整備部、沼田土木事務所、昭和村教委、発掘調査を実施する公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、当事業団と称する）、地元等との協議に入った。

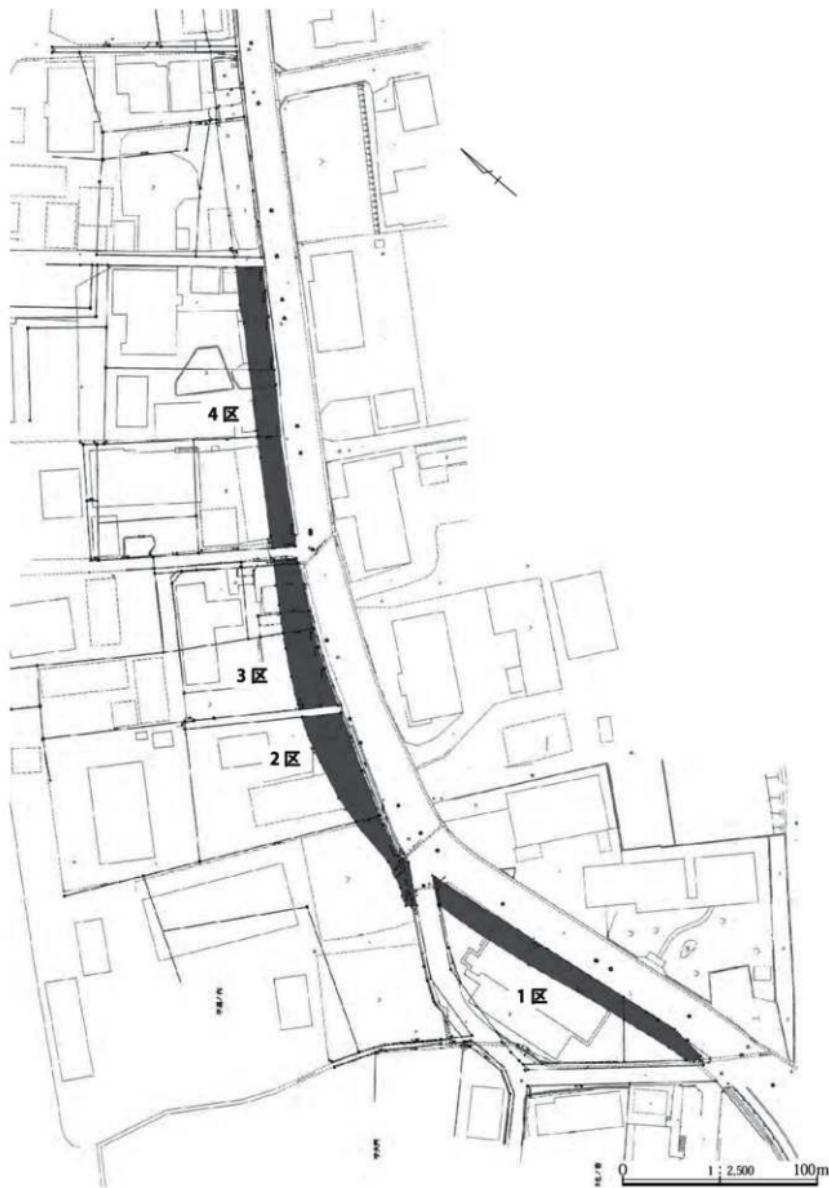
令和3年5月12日、沼田土木事務所が沼土第36107-1号にて昭和村教委宛文化財保護法第94条による届出を提出。同日付け昭教委発第228号にて、昭和村教育委員会は群馬県知事に当該地の文化財保護法第94条による届出を進達した。

調整・協議の結果、当該地における計787.33m<sup>2</sup>を対象とする発掘調査を当事業団が実施することとなり、履行期間を令和3年6月1日～令和3年9月30日、調査期間を令和3年7月1日～令和3年7月31日の1箇月間として、実施されることとなったのである。

なお、今回の調査対象地東側の延長部分については、沼田土木事務所より令和3年10月7日付け沼土第36107-6号にて埋蔵文化財の試掘・確認調査の依頼が文化財保護課にあり、それを受けた文化財保護課が令和3年10月18日に試掘・確認調査を実施したところ、埋蔵文化財の包蔵を確認出来なかった。そのため、県文化財保護課は令和3年10月19日付け文財第706-45号にて事業地について発掘調査が不要である旨を沼田土木事務所長に回答した。

## 第2節 発掘調査の方法

### 1. 調査区と座標の設定



第2図 調査区設定図

調査対象地は面積787.33m<sup>2</sup>で、調査区は現道に沿って南北に細長く「く」の字に屈曲する範囲である。生活道路や水道引込線を境界として大きく1～4区の4ブロックの調査区を設定し、さらに水道引込線などによって、南側から、1区は1-A～1-C区、3区は3-A・3-B区、4区は4-A・4-B区に細分した。なお、中世～古墳時代後期までの遺構が検出された1面では1-A区～3-A区及び4-A区において遺構が検出された。また、縄文時代中後期の遺構確認面である2面では、3-A区と4-A区でのみ遺構が検出された。4-B区では、1・2面を通して遺構は検出されなかった。

発掘調査に用いた座標は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)であり、10m×10mを基本とし設定した。遺構図中の座標については、座標値の下3桁を「X軸-Y軸」の順で記し、「X=72500、Y=-66800場合、「500-800」のように略記した。調査区は、世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)のX=72445～610、Y=-66795～865の範囲にそれぞれ収まる(第図参照)。

遺構測量における遺構の位置及び遺物出土位置などはすべて世界測地系の座標によって記録しているため、本報告書でも、遺構外出土遺物を含め、遺構・遺物の位置情報については、世界測地系の座標によって表記する。

## 2. 発掘調査の方法

発掘調査は、調査範囲を国家座標に載せるための基準点測量から開始し、同時に事務所の設営を行った。

調査範囲確定後、重機による表土掘削を開始し、重機掘削を終了した箇所から、安全を確認した上で発掘作業員を投入し、人力による飼糞を使用しての遺構確認作業を行い、発見した遺構の掘削調査に着手した。

発掘作業員による遺構の掘り下げ等、調査の詳細な方法や手段、手順等については、発掘調査工事請負会社の現場代理人に逐一指示するとともに、常に安全対策を万全とし、作業の安全を十二分に図った上で実際の作業に着手するよう再三に亘って要請した。

埋没土の観察、写真撮影、測量委託業者への図化指示等は担当者が行った。本遺跡では、洪水や火山灰層に埋もれ、複数の遺構確認面が検出されたので、それぞれの調査面で掘削・確認・記録を行った。

出土遺物は、遺物収納箱4箱分の土器・陶磁器・石器・

石製品・金属製品等と、若干の木製遺物が出土した程度であったため、遺物の洗浄・注記作業には現場で行った。

## 3. 遺構測量

遺構等の測量は、遺構断面及び平面実測図とも縮尺1/40を基本とし、堅穴建物の竈などを詳細に実測する際には適宜1/20などの縮尺とした。

遺構平面実測図の作成に当たっては、測量会社にデジタル測量を委託し、データ収録媒体及び打ち出し図面の提出を受けた。

上記、委託先測量会社により作成されたデジタルデータ成果品は、調査記録として保存されている。

## 4. 遺構写真撮影

発掘調査において、すべての遺構の写真は発掘調査担当者が分担して撮影した。主要な遺構については、中判カメラを用いてiso400モノクロフィルムを6×7cm判サイズで撮影し、撮影記録はネガフィルムの状態で保存し、焼き付け写真を貼付したフィルムの検索台帳を作成した。

また、発掘調査の過程で、調査の進捗状況の記録及びすべての遺構について、デジタルカメラで撮影を行った。

また、調査記録として、遺構ごとに土壠断面、遺物出土状態、遺構全景等の撮影を行い、さらに必要に応じて遺構の各部分について、検出および調査の状況について微細な接写を行っている。

調査区の全景写真等は、調査の進展にあわせて高所作業車からの撮影によって行った。

なお、撮影した写真的デジタルデータはH D等のメディアに保存し、データのファイル名は、調査区・遺構略号・番号・撮影方向・内容を数値化したものに置き換えるリネーム作業を行った。

## 第3節 発掘調査の経過

本遺跡は、片品川左岸の低位段丘面に位置し、標高383mで、片品川との比高は30mほどある。発掘調査を実施したのは、令和3(2021)年7月1日から同年7月31日までの1箇月間である。

発掘調査は、県文化財保護課の調整により、沼田土木

事務所の委託を受けた当事業団が実施した。

文化財保護課による試掘調査の結果を受け、Hr-FP(6世紀中頃に榛名火山から噴出した軽石)下面を1面目、ローム漸移層を2面目として遺構検出に努めた。検出された遺構は、竪穴建物1棟、土坑8基、ピット4基、井戸1基等である。出土遺物量は、遺物収納箱4箱である。

発掘調査は、生活道路や水道引込線を境界として1～4区を設定し、各区毎に発掘調査を実施した。調査区内においては、湧水が甚だしく、調査は困難を極めた。

以下、各区の状況について述べる。

## 1区

7月2日から1区の表土掘削を開始し、1面目で竪穴建物1棟、土坑3基、ピット4基が確認された。15日に埋め戻しを完了し、調査を終えた。

## 2区

7月5日から2区の表土掘削を開始し、1面目で集石1基が認証された。7月16日に埋め戻しが完了し調査終了した。

## 3区

2区と同様7月5日から3区表土掘削を開始し、1面で集石1基、2面目で土坑2基が確認された。7月28日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

## 4区

7月12日から4区の表土掘削を開始した。4区ではHr-FPの一次堆積層を確認することが出来ず、Hr-FP混土層となっていた。そこで2面目(ローム漸移層)で古墳時代の遺構と縄文時代の遺構を確認した。1面の遺構として土坑1基、井戸1基、2面の遺構として土坑2基が確認された。7月28日に埋め戻しを完了し、調査を終了した。

7月28日に全ての埋め戻しを完了し、調査を終了した。その後、事務所等や機材の撤収等、必要な作業を完了させ、7月30日をもって現地を撤収した。

## 調査日誌抄

### 令和3年

7月1日(木) 担当者2名着任。調査区設定。調査準備。

除草作業。届出書類等作成等事務。調査区内電柱移設工事。

2日(金) 環境整備、土養作り、調査区結界。

1-A区、重機による表土掘削着手、遺構精査、1号土坑土層断面及び全景写真撮影。1-A区全景写真撮影。

5日(月) 環境整備、土養作り、ガードフェンス内側と調査区境にオレンジネット設定。

1-A区土坑・ピット全体図、基本土層実測、その後埋め戻し。

3-A区1面、重機による表土掘削、遺構確認・精査。

6日(火) 1-B区重機による表土掘削、壁面コンバネ養生。

調査区周辺整備、安全フェンス一部撤去、調査区内水道管探索、電柱移設工事。

7日(水) 1-B・1-C区重機による表土掘削、1面遺構精査。

2・3号土坑・2～4号ピット土層断面及び全景写真撮影。1-B区にて1号竪穴建物検出。1-B・1-C区1面全景写真撮影。3-A区1面精査、全景写真撮影。

8日(木) 1-B・1-C・3-A区全景写真・平面実測。1-B区2～4号ピット、2・3号土坑平面実測。2区1号集石全景写真。2区重機掘削。

9日(金) 2区重機掘削継続。1-B区1号竪穴建物調査継続。3-A区1面重機掘削終了。

12日(月) 1-B区1号竪穴建物土層断面、竪穴層断面実測、写真撮影。1-C区2面重機掘削、精査、土層断面実測。2区1面平面実測。3-A区2面重機掘削、東側平面実測着手・全景写真撮影、西側平面実測着手。4-A区重機掘削。4-B区2面遺構確認・精査。全景写真撮影、平面実測。

13日(火) 1-B区1号竪穴建物全景写真撮影、平面実測、全景写真再撮影、平面及び土層断面再実測。2区2面重機掘削着手。3-A区2面西側重機掘削終了。3-B区重機掘削着手。4-A区重機掘削、遺構確認着手。12：50～14：00、突然の豪雨のため調査中断、全調査区水没。

14日(水) 1-B区1号竪穴建物掘方精査、土層

断面及び平面実測。排水作業、コンパネ等で壁面補強。2区2面全景写真撮影、調査区平面実測及び基本土層実測及び写真撮影。3-A区2面西側遺構精査、基本土層実測、4・5号土坑土層断面及び平面実測。3-B区2面遺構精査、全景写真、基本土層実測。4-A区排水作業、重機掘削、遺構精査。

- 15日(木) 1-B区1号竖穴建物竪掘方全景写真撮影、平面実測、調査終了。1-B区埋戻し。3-A区2面西側遺構精査、全景写真撮影、4・5号土坑全景写真撮影、平面実測。4-A区排水作業、重機掘削、7号土坑土層断面写真撮影。8:30~9:00及び15:45~17:15降雨の為作業中止。
- 16日(金) 2区埋戻し終了。3-A区埋戻し作業継続。4-A区1面1号井戸、2面6・8号土坑土層断面及び全景写真撮影・実測、2面全景写真及び平面実測。
- 17日(土) 調査区内安全対策。4-A区1面1号井戸全景写真、平面実測。
- 19~23日(月~金) 東京電力による電線移設工事他のため調査中断。排水作業継続。
- 26日(月) 4-A区1面1号井戸精査。他調査区埋戻し作業継続。撤収作業着手。
- 27日(火) 4-A・4-B区掘削、遺構確認、これ以上の遺構が無いことを確認。他調査区埋戻し作業継続。徹収作業。
- 28日(水) 全調査区埋戻し完了。撤収作業、安全フェンス解体。
- 29日(木) 撤収作業。県沼田土木事務所に現地引き渡し。
- 30日(金) 調査事務所プレハブ等解体撤去、現地撤収。

## 第4節 整理作業の経過と方法

整理作業は、令和4年4月1日から6月30日までの3箇月間にわたって県沼田土木事務所の委託を受けて、当事業団が実施した。

出土遺物については、まず、報告書に掲載する土器類、石器・石製品類の選別を行い、土器類、石器・石製品類、鉄滓の写真撮影、接合・復元等の作業を実施した。次いで実測・トレース及び遺物観察表の作成を行い、業務を完了した。遺構実測図については、まず調査区ごとに順次、各遺構の確認、遺構計測、遺構台帳の整備といった基礎作業とともに、遺構写真との確認作業を行い、その後、図面修正を進め、点検・整理の上、平面図及び土層断面図の編集及び修正、デジタル・トレース原図の作成、土層注記の編集等の作業を行い、デジタル原稿化を行った。

さらに、報告書に掲載する遺構写真を選定した後、レイアウト原案の作成、キャプション原稿の整備等を行い、レイアウト原案及びキャプション原稿をデジタル専業班に納入し、遺構写真図版頁のデジタル原稿化を図った。

これらの作業と並行して報告書本文の原稿の執筆を進めた。

それらを経て、デジタル化された遺構図面の校正、本文の原稿執筆及び報告書原稿の総合的なレイアウト等の作業、報告書原稿全体のデジタル組版及び編集作業を行った。

作成された原稿は、入札によって落札した業者に委託され、印刷・製本の業務を実施した。なお、業者委託した印刷業務の推移の中で、原稿の校正作業を実施し、完成後、納品を受け、納品された発掘調査報告書は、検品の上、完了検査を実施し、活用に資するために関係各機関へ発送する作業を行った。

また、これらの作業と並行して、調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物の各種図面・写真等の記録類を収納する作業を実施した。発掘調査及び整理業務の過程で作成された遺構・遺物にかかる各種図面及び写真等の調査記録資料は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに収納・保管されている。

### 参考文献(第1章)

- 群馬県2013「はばたけ群馬・県土整備プラン2013-2022」  
群馬県2014「はばたけ群馬・第14次群馬県総合計画・重点プロジェクト(平成26年4月1日改訂)」  
群馬県土整備部道路整備課(道路企画室) 2013「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」  
群馬県土整備部2021「令和3年度版 よくわかる公共事業 利根・沼田編」  
(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団2022「年報」41  
マッピングぐんま  
<http://mapping.gunma.pref.gunma.jp/pref-gumma/top>

## 第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 第1節 地理的環境

#### 1. 地勢

貝野瀬堀ノ内遺跡は、群馬県利根郡昭和村大字貝野瀬堀ノ内に所在している。

遺跡が所在する昭和村は、利根郡東部の最南端に在つて赤城北麓に位置し、北は片品川、西は利根川を境に沼田市、南は渋川市、東は沼田市利根村(旧利根村)に接している。村域面積は64.14km<sup>2</sup>で、その構成は、水田0.72km<sup>2</sup>、畑26.25km<sup>2</sup>、宅地3.05km<sup>2</sup>、山林9.24km<sup>2</sup>、原野0.52km<sup>2</sup>、雜種地2.21km<sup>2</sup>、国有林10.97km<sup>2</sup>、その他11.18km<sup>2</sup>である。気候は概して寒冷で、平均気温は11.6℃である。地域の大部分が火山灰土である。

江戸時代には6村があり勢多郡に属していた。明治11(1878)年に北勢多郡となり、同22年の町村制施行で久呂保村・糸之瀬村が成立し、同29年に利根村に属した。昭和33(1958)年に両村が合併して昭和村が成立し、同36年利根村大字生越が村域に編入された。所謂、平成の大合併による異動はないが、南側に隣接する赤城村が渋川市に、東側に隣接する利根村が沼田市に併合されることにより、北・西・東の三方を沼田市に囲まれる形となつた。

集落は片品川左岸および利根川左岸に形成されている。沼田街道が利根川左岸を通り、現在も主要交通路である。また、平成10(1998)年、開発インターチェンジとして関越自動車道昭和インターチェンジが供用されるようになると、首都圏と直結し、都心部から約80分程度で来訪可能になった。

当村は、赤城山北面の広大な裾野地帯を有しながらも、水利に恵まれなかった為に、片品川・利根川沿岸の低地帯に生活が営まれていた。水利事業の進行とともに裾野の開発が進み、当村近代の歴史は開拓の歴史である。大正末期に赤城開発耕地整理組合が設立され、昭和5(1930)年、群馬県では開墾計画を立て、現・沼田市利根町に及ぶ2690ha地域で、開墾可能な1250haの開発を目的とする灌漑幹線水路の開設調査を当時の農林省に依頼

した。これと並行して開拓道路の幹線を建設し、これら幹線は昭和9(1934)年に完成したが、開墾入植までは種々の困難を経てきた。同15(1940)年には現・大字赤城原(近世には御留山)松ノ木平上辺一帯を陸軍東部第41部隊の演習場として買収されたが、同20(1945)年の敗戦とともに大蔵省所管から農林省に移管され、農地法による開拓地の指定を受けた。演習場800haの開墾入植者の選考など幾多の経緯を経て、そこに出身地の名を取って桐生地区、觀音地区、前橋地区の3区分が設けられた。

現在、村内は過疎の傾向にある。平成27(2015)年10月1日の国勢調査人口は7347人である。

産業面では純農村地帯として比較的大規模な經營である。畑作、とくに野菜栽培が盛んで、高原野菜の产地として知られ、キャベツ、白菜、大根、コンニャクなどが作られている。

#### 2. 地形

**概要** 村域の大部分は赤城山北西麓で、東西約10.8km、南北約9.8kmの扇状の形態をなし、標高は260mから1461mで、500mから800m付近までは緩やかな傾斜地をなし、所謂、赤城高原を形成している。また、北東から流下する片品川は、北西から流下してくる利根川に合流し南西に向かって流れている。

**片品川流域の地形** 片品川は、群馬・福島・栃木の県境付近に位置する標高2000m内外の山地に源を発し、戸倉付近より南方へ20数kmの間、直線的な河谷を形成している。

片品川左岸には、北より日光白根山・皇海山などの両輝石安山岩類からなる標高2000m内外の諸火山と、その基盤を成す新第三系の片品川流紋岩類からなる山地が分布している。東からは大滝川・汗川などの支流が合流する。

右岸には花崗岩類と武尊山の安山岩類が分布している。各支流の流路は短く、分水界と本流との標高差が大きいため、急峻な地形になっている。分水界付近では、多数の崩壊地が分布し、多量の岩屑を本流へ供給してい

るため、片品川左岸側には顕著な段丘の発達が見られる。

赤城山北麓の、片品川が流路を西へ転ずる地域周辺には、蘭原湖成層、中生代の堆積岩類の岩室層や石英斑岩・蛇紋岩が分布している。左岸側には赤城山の噴出物とその二次堆積物からなる火山麓扇状地が発達しており、これを侵食して形成された峡谷が見られる。右岸側には古沼田湖に堆積した厚さ50~100m内外の沼田湖成層と沼田礫層によって構成された東西10km、南北2~3kmの沼田台地が位置している。

**河岸段丘** 沼田台地と赤城山との間を流れる片品川には、よく発達した段丘群が連続的に形成されている。一方、沼田盆地北西に北から流入する利根川は、片品川が形成した段丘群に流路を押しやられ、河道を固定化されて盆地西縁を流れている。片品川との合流点より下流側では、赤城山と子持山との間の峡谷を南流し、渋川市付近で関東平野に入る。この地域には、浅間山などの西方諸火山起源のテフラ層や年代指標層が分布しており、赤城山の活動史と段丘形成史の解明に有効な材料となっている。

片品川流域に発達する更新世の河岸段丘群を、段丘縦断面上の連続性・高度およびテフラ層との層序関係から、上位より低山面(To)・沼田面(Nu)・追貝原面(Ok)・伊闇面(Ik)・平出面(Hi)・貝野瀬Ⅰ面(Ka-1)・貝野瀬Ⅱ面(Ka-2)・貝野瀬Ⅲ面(Ka-3)・低位面(L面)の9段の段丘面群に区分されている。片品川南岸付近の本遺跡周辺一帯は、貝野瀬Ⅰ~Ⅲ面の3つの河岸段丘に分類される。

**貝野瀬Ⅰ面** 貝野瀬Ⅰ面は、片品川上流では追貝付近から蘭原にかけて断続的に分布する。現河床からの比高は、追貝付近で約60m、蘭原付近で約90m、貝野瀬で約80m、棚下周辺で70mである。貝野瀬Ⅰ面構成層は、蘭原で約15mに達し、埋没谷が認められることから、本面は堆積段丘面と考えられる。この段丘礫層は貝野瀬Ⅰ礫層と呼ばれている。貝野瀬Ⅰ礫層の厚さは、沼田盆地の貝野瀬で約10m、薄根川や利根川では4~5mと薄くなっている。しかしながら、現在の貝野瀬Ⅰ面の分布から判断して、形成当時には本面の分布面積は広かったと推定出来る。このような地形の特徴から、片品川の貝野瀬Ⅰ面は、上流山間部では堆積、下流沼田盆地内では谷底平野を掘げる作用により形成されたものと考えられ

る。

貝野瀬Ⅰ面の直上には、榛名三原田軽石(HMP)以上のテフラが堆積していることから、貝野瀬Ⅰ面は約3万年前頃には段丘化していたと推測される。

**貝野瀬Ⅱ面** 貝野瀬Ⅱ面は、貝野瀬Ⅰ面を侵食する過程で形成された段丘面である。現河床からの比高は追貝で約50m、貝野瀬で約65m、棚下で約40mである。段丘の分布は狭く、連続性に乏しいこと、段丘構成層の厚さは約5m前後と薄く、基底地形は平らであること等から、本面は侵食段丘面と推測される。

吹屋原では、礫層の直上を前橋泥流堆積物(MMF)以上のテフラが堆積しているので、本面は約2.5万年前頃に段丘化したと考えられている。また、沼尾川との合流点付近では、約3万年前の榛名三原田軽石(HMP)が、周囲の斜面から段丘礫層基底にかけて見られるので、貝野瀬Ⅱ面の形成期間は約5000年間であったと推測される。

**貝野瀬Ⅲ面** 貝野瀬Ⅲ面は、片品川本流、深川、栗原川の流路に沿って連続する段丘面である。現河床からの比高は追貝で約40m、貝野瀬付近で約50mである。礫層の直上を浅間・草津黄色軽石(As-YPk)以上のテフラが堆積しているので、本段丘面は約1.5~1.3万年前頃に段丘化したと推測される。段丘面構成層は約5m前後と薄く、基底地形は平坦であるが、段丘面の分布は広く、連続していることから侵食段丘面と考えられる。

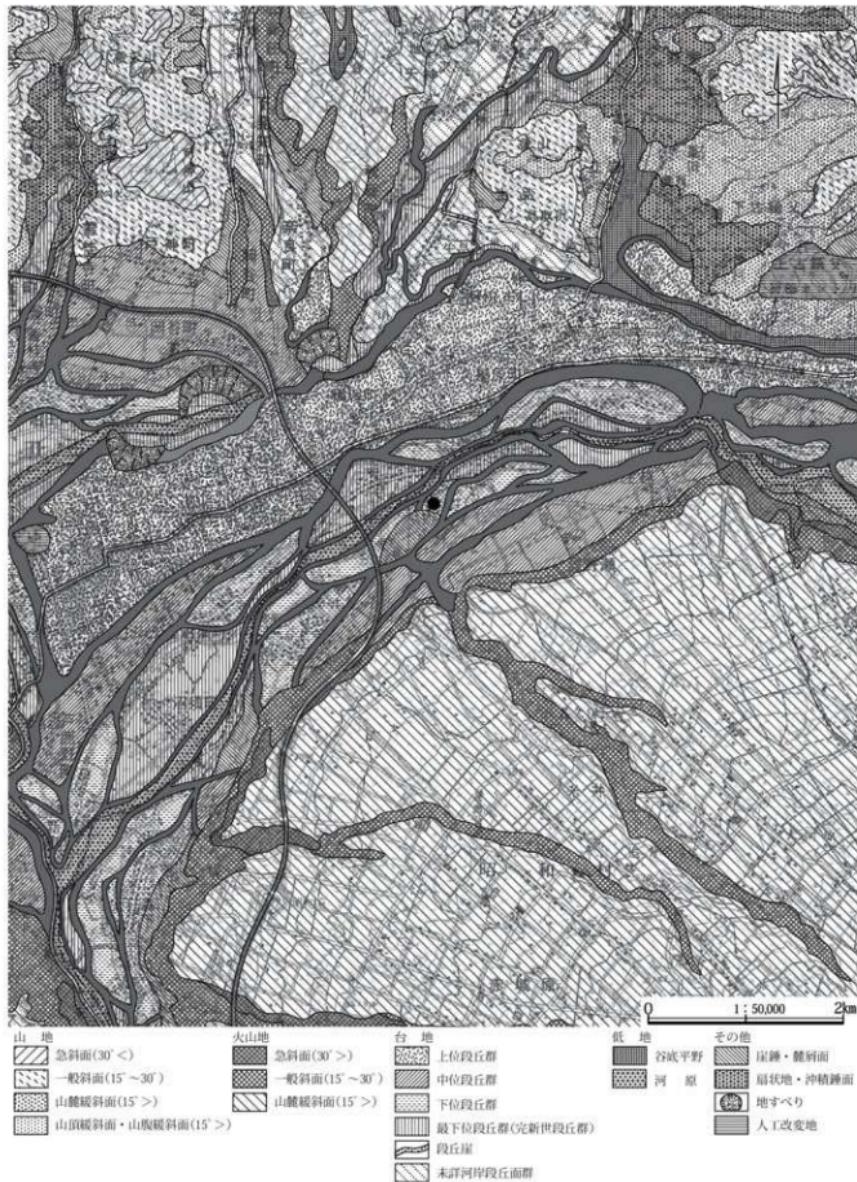
本遺跡は、この段丘上に立地し、標高は383mである。現在の片品川との比高は約30m程度である。

なお、上記の記述は、竹本弘幸「利根川水系片品川流域の地形発達史—赤城山の活動とその影響について—」(『地理学評論』第71巻A-第11号、1998、783~804頁)に拠った。

## 第2節 歴史的環境

昭和村域では、片品川に架橋する関越自動車道が南北から北西にかけて大きく弧状に屈曲する内側において発掘調査が多く行われており、それ以外の場所では決して多くはないのが実情である。これらの地域において検出された遺跡の多くは、約1km前後の距離で接し、検出された遺構・遺物の時期も近接或いは重複している。

昭和村内において、遺跡は片品川が形成した河岸段丘



第3図 周辺地形分類図

(国土交通省国土政策局国土情報課1/50,000都道府県土地分類基本調査・地形分類図「道具」、「沿田」を加工)

の各面に分布している。段丘面は、赤城山麓に降った雨が浸透性のある土壌を通り湧き出す点が段丘崖下にはいくつもあり、生活用水を確保するのに容易な場所であった。縄文時代の陥し穴以外には、村内の遺跡の多くは、段丘崖からの湧水を利用し易い下位の段丘面上に営まれている。ただ、段丘面は狭くて細長い上、現在では埋没してしまった数多くの小谷によって分断されているので、段丘面上に立地している遺跡の規模は、地形の制約を受けている。

村域全体が6世紀中頃に降下したHr-FPに厚く覆われており、この軽石下には、まだ多くの遺跡が存在している可能性が否定出来ない。

### 1. 旧石器時代

本遺跡の南東約7.4kmに位置する長井坂城址遺跡(第4図範囲外)からは、AT下からナイフ形石器を中心に11点の製品が出土しているが、その後、旧石器時代の遺跡の調査例はない。

### 2. 縄文時代

縄文時代になると、本遺跡周辺の遺跡数は多くなる。  
**早期～前期の遺跡** この地域において最も古く営まれた集落は、本遺跡の南西約1.5kmに位置する中棚遺跡(第4図40)である。この遺跡は貝野瀬Ⅰ面に立地しているが、この遺跡からは縄文時代早期と考えられる土坑が検出されており、遺構外からも縄文時代早期の遺物が出土しているので、縄文時代早期の集落の存在が想定される。また、同遺跡からは、縄文時代前期中葉～後半の竪穴建物が26棟検出され、良好な土器群が出土している。同遺跡では、西に開いた埋没谷の縁辺部を巡るように、1～2棟を一つの縦まりとして継続して営まれていた様子が判明している。

この中棚遺跡の一段下の段丘面である貝野瀬Ⅱ面に立地し、中棚遺跡の北側に隣接する糸井宮前遺跡(第4図38)は、本遺跡の南西約1kmに位置しているが、この糸井宮前遺跡においても中棚遺跡と同時期である縄文時代早期後半～前期の集落が検出されている。

**中期～後・晚期の遺跡** 中期から後・晚期の中心とする集落が展開するのは、さらに1段下がった貝野瀬Ⅲ面及び下位段丘面である。

本遺跡の南東約1.3kmに位置する糸井太夫遺跡(第4図42)からは縄文時代中期末から後期にかけての敷石竪穴建物を主体とする集落が検出された。西側の片品川へ下る斜面からは晩期の土器群も出土している。

また、本遺跡の南西約1.2kmに位置している糸井宮ノ前遺跡(第4図41)からも縄文時代中期から後期にかけての遺構・遺物が数多く検出されている。石器の原石や未成品、完成品が相当数出土していることから、拠点的な集落であったと考えられる。縄文時代晩期の遺物も出土しており、長期にわたって集落が営まれていたことが判明した。

**その他の縄文時代遺跡** その他の縄文時代の遺跡としては、赤城山麓が第一段丘面に下がる段丘崖の端に立地し、本遺跡から南東へ約1.8kmに位置する貝野瀬中泉坂ノ上遺跡(第4図9)からは60基の縄文時代の陥し穴が検出された。遺物の出土が皆無であるので、詳細な時期は不明であるが、層位から縄文時代のものと判断された。

また、この他にも、発掘調査されたわけではないが、本遺跡の南東側の赤城北西麓からは縄文時代のものと考えられる陥し穴がいくつか発見されている。

### 3. 弥生時代

昭和村域において発掘調査された弥生時代の遺跡は極めて少ない。

前掲の糸井太夫遺跡からは、弥生時代後期の樽式土器が出土した竪穴建物が1棟検出されている。

他に、弥生時代の遺構が検出された遺跡としては、前掲の中棚遺跡がある。弥生時代末から古墳時代初頭のものと考えられる竪穴建物が4棟検出されている。また、本遺跡の南西約5.2kmに位置する川額原Ⅰ遺跡(第4図範囲外)からは弥生時代中期竜見町式の壺型土器を用いた再葬墓が1基検出され、遺構外からは中期竜見町式～後期樽式土器が出土している。

### 4. 古墳時代

**古墳** 利根・沼田地域には数多くの古墳が分布している。古墳の分布は、大きく4つの地域に分けられる。

①利根川・片品川合流点左岸の昭和村川額・森下・糸井地区

②薄根川中流域の川場村天神・生品、沼田市秋塚・

## 奈良地区

- ③三峰山南・南西麓の沼田市宇楚井・堀廻・井土上、みなかみ町師・政所・後閑・真庭  
④赤谷川・利根川合流右岸のみなかみ町上津・塚原地区

6世紀初頭に噴出・降下したHr-FAは昭和村域内では層位としては明確には確認されてはいない。発掘調査の過程においてHr-FP層下の黒色土中に、ブロック状にHr-FAの存在が報告されている遺跡もある。昭和村域に所在する古墳の多くは、横穴式石室を有するもので、Hr-FP降下後に築造された古墳が大半を占めている。中には、竪穴系主体部を有すると推定され、埴輪を伴った軍原8号墳、Hr-FPによって直接埋没した鏡石古墳などがある。

群馬県が昭和13(1938)年に刊行した『上毛古墳総覧』には、現在の昭和村域に相当する久呂保村に前方後円墳1基、円墳60基、型式不明その他3基の計64基、また糸之瀬村には前方後円墳2基、円墳68基、型式不明その他3基の計73基、現在の昭和村域において合計137基の古墳が掲載されている。なお、平成29年(2017)年に群馬県が刊行した『群馬県古墳総覧』には、昭和村内に所在する古墳として93基が掲載されている。昭和13年刊行の『上毛古墳総覧』には誤認や脱漏があり、また、『上毛古墳総覧』に掲載されていても、平成29年に『群馬県古墳総覧』が刊行されるまでの間に、破壊されてしまったものもある。故に、『上毛古墳総覧』掲載の古墳数と『群馬県古墳総覧』掲載の古墳数との間には齟齬が生じているのである。

本遺跡の西南西約1.35kmに位置する追墓古墳(第4図35)は、『上毛古墳総覧』所収の利南村8号墳に該当する。墳丘は殆どが流失し、天井石及び壁石の上部が露出している状況であったが、発掘調査の結果、蓋石を有する径約13.07mの円墳であったことが判明した。主体部はほぼ南に開口した自然石乱石積の両袖型の横穴式石室である。出土した須恵器の年代観、Hr-FP上に構築されていることや埴輪が無いことから7世紀初頭頃に造営されたものと考えられている。

**岩下清水古墳群** 本遺跡の南西約7kmには岩下清水古墳群(第4図範囲外)がある。『上毛古墳総覧』には17基の古墳が掲載されている。近年の発掘調査において2基の古墳の一部が調査された。

利根・沼田地域においては古い時代の古墳が多いこと、方形の積石塚古墳が存在していることなどの特徴が挙げられる。

**川額軍原1遺跡・森下古墳群** 前掲の川額軍原1遺跡の範囲には森下古墳群も含まれている。この遺跡では、軍原1～8号古墳、鍛屋地1・2古墳、諏訪平1～3号古墳、御門1～4号古墳等計17基の古墳が発掘調査されている。いずれも径5～23mの規模の横穴式石室を有する円墳で、積石塚も含まれている。

Hr-FP降下直前である6世紀中葉のものと考えられる軍原8号古墳以外の16基は7世紀以降の終末期に属する古墳である。これらの古墳のうち、鍛屋地2号古墳は径約22.54mの横穴式石室を有する古墳で、利根・沼田地域最大級の古墳である。石室内からは土器は殆ど出土せず、五鉢鏡、大小の刀5振、刀装具、多量の鐵鏹、轡・鏡・杏葉・辻金具・飾金具などの多種多様な馬具類、勾玉・切子玉・管玉・小玉といった玉類などが出土し、注目されている。

なお、鍛屋地2号古墳の東側約100mに位置し、1段高い段丘上に立地する『上毛古墳総覧』所収の久呂保村3号墳からも、明治時代に五鉢鏡が出土している。現在、古墳は殆ど原形をとどめておらず、出土した五鉢鏡は東京国立博物館に収蔵されている。

また、『上毛古墳総覧』に漏れ、耕作中に地表下約50cmの位置から発見された久呂保中学校裏古墳も、後掲する鏡石古墳と並んで、この地域においては比較的早い時期に発掘調査が行われた古墳の一つであり、森下古墳群を構成していた古墳の一つであると考えられる。下位段丘面に立地し、Hr-FP降下後に造られた横穴式石室を有する小円墳である。埴輪はなく、7世紀後半代の古墳と考えられている。

**鏡石古墳** この地域において、比較的早い時期に発掘調査された古墳である(第4図範囲外)。

赤城西北麓を背後に、利根川左岸の幅狭い段丘傾斜地に立地する古墳で、利根川左岸に沿って分布する岩下清水古墳群の南限に位置し、利根川上流域から中流域に散見される所謂積石塚の一つで、直径約7mの2段築成の小円墳である。墳丘は亜角礫角礫の山石によって積み上げられ、先述した通り、Hr-FPによって完全に埋没しており、6世紀前半頃の築造と考えられる。

埋葬施設は輝石安山岩の自然石が使用されており、長軸が約1.85m、幅が約50~60cmの箱形棺状で、石室内の西側部分からは推定年齢40~50歳程の男女各1体の人骨が埋まっている。出土状態から、再葬による同時埋葬か追葬によるものとみられる。

埴頂部及び基壇部の2段に円筒埴輪を配列している。埴頂部には円筒埴輪を隅丸方形に配列した可能性が高く、その内部に家形埴輪を配置したとみられる。また、埴頂部北側から土師器杯、埴頂部西側根石近くから土師器壺が出土している。いずれも6世紀前半の土器である。このような出土遺物や石室の構造、埴丘がHr-FPに覆われ埋没していたことなどの点から、6世紀前半の築造と考えられている。

**奈良古墳群** 本遺跡の北西約1.9kmに位置する奈良古墳群(第4図18)は、薄根川中流域右岸の小盆地状を呈する河岸段丘の上位段丘面に立地し、東西約400m、南北約200mの範囲に17基の古墳が密集する群集墳である。昭和30(1955)年に群馬大学が実施した調査では、古墳の痕跡と推測されるものも含めて59基が確認されたが、開墾によって多くの小規模古墳が破壊されたと考えられる。また、平成11(1999)年には土地改良事業に伴い9基の古墳が発掘調査された。いずれも径7~20m程度で、葺石、乱石積横穴式石室を有し、埴輪のない円墳である。

Hr-FP降下後に築造されており、7世紀代に形成されたものと考えられている。

発掘調査の結果、直刀・鉄鎌などの武具類、轡・鏡・杏葉などの武具類、耳環、玉類等が出土した。金銅製で毛彫文様の馬具飾金具は群馬県内でも類例が少ない貴重な資料である。

**集落遺跡** 本遺跡の南西約1.5kmに位置する中棚遺跡(第4図40)からは、先述したように弥生時代末から古墳時代初頭頃のものと考えられる竪穴建物が4棟検出されている。

また、1段下位の段丘面に展開する糸井宮前遺跡(第4図38)では、石田川式土器が出土する古墳時代前期の集落が検出されている。本遺跡の南西約1.2kmに位置し、1段下位の段丘面に立地する糸井宮ノ前遺跡(第4図41)からもHr-FP降下後に形成された集落が検出されている。

**水田遺跡** 前記の糸井宮ノ前遺跡、本遺跡の南西約5kmに位置する川瀬原Ⅱ遺跡(第4図範囲外)、本遺跡の南

西約2kmに位置する糸井白久保遺跡(第4図範囲外)においてHr-FPによって埋没した水田が検出されている。なお、いずれの遺跡においてもHr-FP降下後の水田の復旧の痕跡を見出すことは出来なかった。

## 5. 奈良・平安時代

**上野国利根郡** 律令制下において、群馬県域はほぼ上野国の領域に当たっており、国内には「碓冰・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。

本遺跡が所在する利根郡は、上野国北東端に位置しており、北側は吾妻郡と共に陸奥国と、東側は下野国と接している。『日本後紀』弘仁2(811)年10月5日条に「上野国利根郡長野牧賜三品葛原親王」と見えるのが史料上の初見である。利根郡内に長野牧という官牧があり、それが葛原親王に下賜されたということである。この「長野牧」についてはこれ以外の史料には見えないため、『延喜式』左右馬寮式に見える上野国9御牧のうちの久野牧と同一と見る説がある。なお、久野牧の所在地としては、現在のみなかみ町上牧・下牧一带に比定する説が有力であるが、現・沼田市上久屋町・下久屋町付近に想定する説もある。なお、弘仁2年に葛原親王に下賜された長野牧が、『延喜式』左右馬寮式に見える官牧の一つである久野牧と同一であるならば、葛原親王の薨後、『延喜式』編纂までの間に取公され、再び官牧になったということになる。

利根郡は、『和名抄』によると渭田・男信・笠科・呉桃の4郷からなる。

渭田郷は現・沼田市街地、男信郷は現・川場村生品がその遺称と考えられる。笠科郷については、片品村の「片品」の地名が笠科郷の遺称と見て現・片品村一带に比定する説と、現・昭和村森下一带に比定する説がある。昭和村森下には、前述の森下古墳群があり、「御門」という小字もある。尾崎喜佐雄博士は、この「御門」の小字を郡家所在地の名残と見て、笠科郷を郡家所在郷と見る考え方を示している。高崎市吉井町に所在する多胡碑の所在地が大字池宇御門であり、多胡郡家の所在地に近い場所と考えられる点を勘案したことである。呉桃郷は、現・みなかみ町の旧月夜野町上津・下津の地が江戸時代

初めて名胡桃村と称されていたので、遺称地とみてまざ間違があるまい。

なお、郡家の遺跡はまだ発見されていない。また、都内に式内社は所在していない。

**月夜野古窯跡群** みなかみ町内の旧月夜野町の利根川右岸、上越新幹線上毛高原駅周辺には月夜野古窯跡群(第4図範囲外)が所在している。洞・戸田・沢入・深澤・須磨野・真沢・水沼などの沢に8~10世紀頃の窯が分布し、洞で一部瓦を焼成したほかは、大半は杯・皿・羽釜など須恵器食器を生産した。また、上越新幹線および上毛高原駅建設に伴って発掘調査された戸田・戸田東両遺跡(第4図範囲外)では須恵器生産に従事した工人集落及び粘土採掘坑が検出されており、近接する洞・戸田古窯跡等との関連が明確になった。また関越自動車道建設に伴って旧月夜野町内で発掘調査された上石倉・大竹・高平・門前Aの各遺跡(第4図範囲外)などからは、いずれも平安時代の竪穴建物群で構成される集落が検出されているが、右岸に位置する月夜野古窯跡群が須恵器食器類の供給源であった。

**集落** この地域においては8世紀代の集落はまだ発見されていない。

前掲の糸井太夫遺跡からは10世紀前半から中葉の竪穴建物が10棟検出されたが、10世紀後半以降、集落は衰退していく。僅か数十年の比較的短い間に集中して集落が営まれていたことが判明した。

この糸井太夫遺跡よりも1段上位の段丘面に展開している前掲の糸井宮ノ前遺跡では6~11世紀の集落が検出されている。竪穴建物の重複も見られ、長期に亘って集落が継続していた様子が伺える。糸井宮ノ前遺跡の隣接地には小高神社が鎮座しており、「日本三代実録」貞觀5(863)年条に從五位下の神階を授けられた小高神社をこれに当てる考え方がある。

さらに1段上位の段丘面に立地している前掲の糸井宮前遺跡では、9世紀後半~11世紀前半の26棟の竪穴建物からなる集落が展開している。各竪穴建物は密集せず、散在している。

糸井宮前遺跡と同じ段丘面に立地し、本遺跡の南西約0.9kmに位置する大貫原遺跡(第4図39)からは、9世紀後半~11世紀前半の竪穴建物が6棟検出された。

また、前掲の中棚遺跡からは、10世紀後半~11世紀前

半の15棟の竪穴建物が、段丘面の広い範囲に点在して営まれている。

この地域においては、集落域は、縄文時代と古墳時代においては、それぞれ時期を追うごとに上位の段丘面から下位の段丘面へと移っていく傾向が認められる。ところが、平安時代になると、集落は、糸井宮前遺跡が立地する中位の段丘面から上下の段丘面に広がっていき、10世紀後半には各段丘面に集落が併存するようになる。しかし、下位の段丘面に営まれた集落は永続せず、こうした景観は半世紀程度で見られなくなってしまう。

**寺院・官衙** 片品川と利根川とが合流する、本遺跡の南西約5kmに位置する森下地区からは、遺構は明確ではないが、瓦片や瓦当片が出土している。また、この地域には前掲の「御門」の他、「化粧坂」、「宮原」、「御室」、「塔ノ前」などの特異な小字名が見られることから、利根郡家の所在地として有力視されている。

## 6. 中世

**天仁元年の浅間山噴火** 沼田市の川田地区では、中世の浅間山大噴火に伴って降下した火山灰に覆われた水田が検出され、場所によっては数~数十cmの厚さで水田面を覆っていたことが確認されている。浅間山の真東に位置する上野国南部平野部における被害状況と比べれば随分とその規模は劣っているものの、一時、水田耕作が不可能になるほどの被害に見舞われていたことが伺え、その被害は沼田市街地一帯から南方の昭和村の一部を含む範囲に及んでいたものと推測される。

**利根・沼田地方の王家領莊園** 利根・沼田地方にも12世紀末までに莊園が設定されていたことが、いくつかの史料によって窺い知ることが出来る。康治2(1143)年8月19日の太政官牒案(安樂寿院文書)に、京都南郊の鳥羽離宮の地に鳥羽上皇によって営まれた安樂寿院領として土井出笠科莊が、同庄の西限として隅田莊が見える。土井出は、現・片品村土出、笠科は現・片品と考えられる。隅田莊は利根川の異称である隅田川に由来する名称で、利根川沿いの莊園と見られる。この土井出笠科莊は、同牒に記す四至に依れば、現・利根郡域の中央部から東半に及ぶ広大な範囲がその領域であった。なお、この土井出笠科莊は、土井出と笠科の2つの地域からなる複合的な莊園と見る考え方がある。後には隅田莊を含め、利根

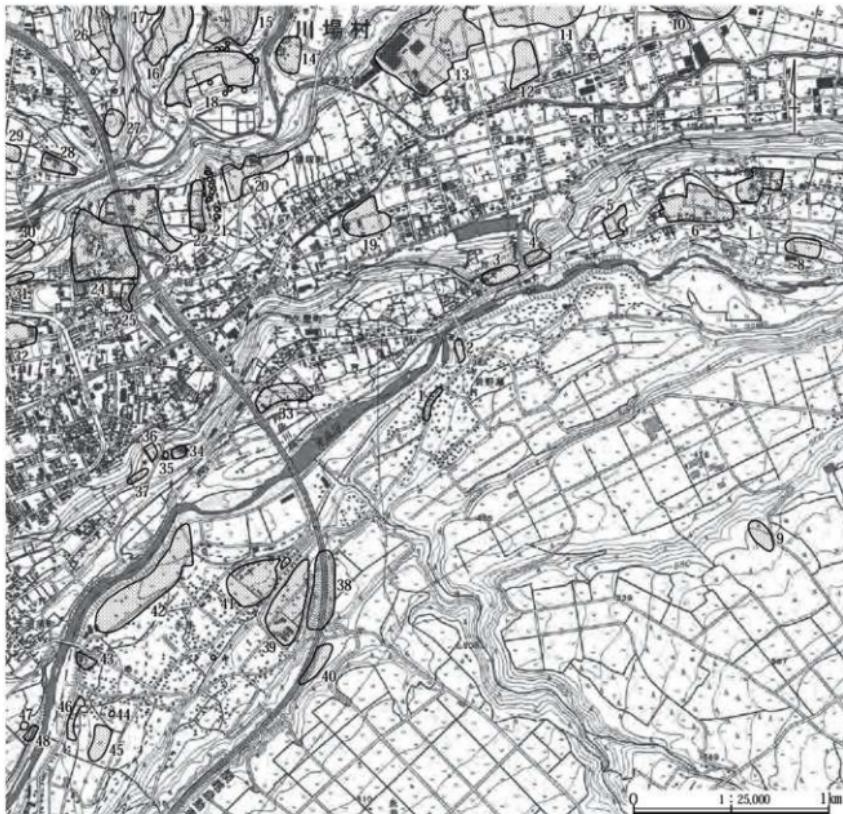
荘と称されるようになる。もと沼田市榛名町の榛名神社に伝來した正応3(1290)年銘の梵鐘(現存せず)には、「上野國利根莊内白根郡春名權現」との銘があり、薄根川沿岸まで利根莊の領域に含まれていたことが判明する。利根莊は、鎌倉時代後期には豊後守護大友氏が地頭職を有していた。大友氏の所領となった経緯については不明であるが、おそらく、この地域における莊園は、14世紀初頭までは安楽寺院領であったが、その後、大友氏に与えられたのであろうと推測される。両朝合一後は公家の万里小路家領となっている。

南北朝期前後に沼田の地が上越の結節点となり、関

東と越後とを結ぶ要地となった。利根郡と越後とは三国峠越の三国街道、清水峠越の清水峠越往還で、会津とは東入山中・尾瀬沼を経る会津街道で結ばれていた。とくに越後との往還路は古くから重要な役割を果し、当郡域もその動きに左右されることが多かったとみられる。

応永23(1416)年の上杉禪秀の乱以後は、上州白旗一揆が郡内でも勢威をふるい、利根莊も押領された。万里小路家は利根莊を代官請負とし家領の回復に努めているが、はかばかしい成果はなく、以後、打続く戦乱のなかで有名無実化していった。

**戦国期** 永禄3(1560)年に上野国を手中にした上杉謙信



第1表 周辺遺跡一覧表

	遺跡No・名称	財石	磯文	弥生	古墳	奈平	中近	種別・概要	文献・備考
1	昭和村0049 貝野瀬原ノ内遺跡		○		○		○	礎文時代中後期土坑4基、古墳時代後期 壁穴建物の基・井戸1基・土坑3基・ビック ト4基・中近世土坑1基。集石2基	本報告書
2	沼田市0012 遠久保遺跡			○				散布地。	
3	沼田市105 繩渦遺跡		○					散布地。	
4	沼田市106 久屋原敷道跡		○	○			○	城砲	
5	沼田市107 菊原遺跡		○	○				散布地。	
6	沼田市108 下清水遺跡		○	○			○	集落。	1
7	沼田市109 中清水遺跡		○	○				散布地。	
8	沼田市113 上屋橋場遺跡		○	○				集落。	1, 2
9	昭和村0030 貝野瀬中泉坂ノ上遺跡		○					墳墓	3
10	沼田市104 開墾遺跡、横塚高野原遺跡		○	○				集落(壁穴建物2棟断面調査)	
11	沼田市102 林ノ上遺跡、高野原遺跡、佐々木遺跡		○	○	○			集落・古墳・墳墓。	4
12	沼田市103 佐々木新田遺跡		○	○	○			散布地。	
13	沼田市101 貴塚遺跡、濱訪後遺跡、古道遺跡		○	○				散布地。	
14	川場村0020 生品五六遺跡				○			散布地。	
15	沼田市N0091 齋良田向遺跡		○	○				集落。	5
16	沼田市N0090 下原遺跡		○	○				散布地。	
17	沼田市N0088 下原遺跡							散布地。	
18	沼田市N0213 齋良古墳群				○			古墳	6
19	沼田市N0100 久保遺跡、中原遺跡					○		散布地。	
20	沼田市N0099 清水遺跡、下宿浦遺跡		○	○	○			集落。	7
21	沼田市N0214 愛宕墳墓群						○	墳墓。	
22	沼田市N0098 愛宕遺跡		○	○				散布地。	
23	沼田市N0097 繩渦遺跡		○	○			○	集落。	8
24	沼田市N006 繩渦台遺跡		○	○			○	集落。	9
25	沼田市N0095 金井遺跡							散布地。	
26	沼田市N0086 峰道跡		○	○				散布地。	
27	沼田市N0087 濱訪遺跡							散布地。	
28	沼田市N0081 熊野遺跡							散布地。	
29	沼田市N0080 熊野遺跡						○	散布地。	
30	沼田市N0092 赤谷遺跡				○			散布地。	
31	沼田市N0093 林ノ上遺跡			○				散布地。	
32	沼田市N0094 十三割遺跡			○				散布地。	
33	沼田市N0161 前原遺跡、中河原遺跡、河原遺跡					○		散布地。	
34	沼田市N0160 道泉遺跡					○		集落。	沼田市教委平成8年 調査
35	沼田市N0230 通景古墳					○		古墳。	
36	沼田市N0159 橋坂遺跡				○			散布地。	10
37	沼田市N0158 橋坂遺跡				○			散布地。	
38	昭和村0039 糸井宮前遺跡		○	○	○	○		集落。	11
39	昭和村0002 大貫原遺跡		○	○	○			集落。	12
40	昭和村0038 中棚遺跡		○	○	○	○		集落。	13
41	昭和村0033 糸井宮ノ前遺跡		○	○	○	○		集落・墳墓・生產遺跡。	昭和村教委平成7~ 9年度調査
42	昭和村0032 糸井太平遺跡		○	○	○	○		集落・墳墓。	昭和村教委平成5~ 7・9年度調査
43	昭和村0013 吹張Ⅱ遺跡				○	○		散布地。	
44	昭和村0014 十日塚古墳					○		古墳。	村指定史跡、認定: 糸井瀬村4号
45	昭和村0014 八日市遺跡				○	○		散布地。	
46	昭和村0018 八日市古墳群				○			古墳。	村指定史跡、認定: 糸井瀬村5~9号
47	沼田市N0231 利南村7号墳					○		古墳。	
48	沼田市N0241 川端遺跡					○	○	集落。	

1 沼田市教育委員会編 1993『上久屋地区遺跡群』

2 沼田市埋蔵文化財調査団編 1988『上久屋橋場遺跡』

3 昭和村教育委員会編 1994『貝野瀬中泉坂ノ上遺跡』

4 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1989『門前橋詰・桜海戸・高野原遺跡』

5 沼田市教育委員会編 1990『奈良地区遺跡群(奈良田向遺跡)』

6 沼田市教育委員会編 2001『奈良古墳群』

11 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1986『糸井宮前遺跡』I・II

12 昭和村教育委員会編 2004『大貫原遺跡』

13 昭和村教育委員会編 1985『中棚遺跡』

\*上記文献以外に群馬県地図情報システム「マッピングぐんぐん遺跡マップ」  
<http://mapping-gumna.pref.gunma.jp/pref-gumna-iseki/Portal/>を参照した。

7 沼田市教育委員会編 1996『下宿浦遺跡』

8 群馬県埋蔵文化財調査事業団編 1989『縫合・師B遺跡』

9 沼田市埋蔵文化財調査団編 1990『縫合台遺跡』

10 沼田市埋蔵文化財調査団編 1995『追景古墳』

第4図 周辺遺跡分布図

は、履橋城とともに沼田城を関東経略の拠点としたため、以後上杉氏・甲斐武田氏・小田原北条氏による三つ巴の争いのなかで、郡内の各所の城・要害では攻防が繰返された。主な城館としては、利根川左岸では森下城(鎌田城、沼田市)、阿曾要害(昭和村)、右岸では小川城、名胡桃城(現・みなみみ町、旧月夜野町)、宮野城(猿ヶ京城、現・みなみみ町、旧・新治村)等があげられる。

宮野城は三国作を越えて越後から上野に入る際の、謂わば玄関口に立地しており、上杉氏は「関東の大手」と称し、関東侵攻時的重要戦略拠点とした。

小川城は三国街道と清水峠越往還が合流する交通の要衝に位置し、永禄10(1567)年頃、利根川西部が武田方となるなかで、城主小川可選は上杉方として働き、沼田城と越後とを結ぶ重要拠点として機能した。

**名胡桃城** 現在のみなみみ町下津に所在する名胡桃城は利根川の右岸、湯舟沢という小さな沢の北側の段丘上に築かれた平丘城で、東西70m・幅25mの本丸の西に、東西110m・南北90mの二ノ丸、南北70m・幅30mの三ノ丸が並び、この3つの郭を中心に、東側にささ郭など、北に般若郭、東南に丸山の水の手郭を配し、西は三ノ丸の角馬出しによって外郭と連結し追手虎口となっている。中心の3つの郭と東のささ郭など小規模な郭のそれぞれの間は、堀切と土橋とで接している。

沼田城の支城として、沼田氏の支族である名胡桃氏が築き、居城したと伝えられるが、築城年代は不明である。

永禄3(1560)の上杉謙信による上州制圧後は上杉氏の支配するところとなり、天正6(1578)年の謙信死後の上杉氏跡目争いの内紛である御館の乱によって、上野国における上杉氏の勢力が後退すると、西から甲斐武田氏、南から小田原北条氏の勢力が当地にも及んでくるようになる。天正8(1580)年には、後退する北条方を追って武田方の真田昌幸が入城し(『加沢記』)、家臣に知行宛行をして支配を固めている(同年九月日武田家定書写「長国寺殿御事蹟稿」所収など)。

天正15(1587)年、九州を平定した豊臣秀吉は12月、関東と奥羽に懇意無事令(私戦禁止令)を発して、関東・奥羽地域の諸勢力を支配下に治める布石を打った。秀吉は天正17(1589)年7月、利根郡地域での真田氏と北条氏の対立に介入し、真田氏に命じて上野支配地域の3分の2(沼田領)を北条氏に割譲させ、北条氏は取得した沼田城に

猪俣直を配置した。ところが11月に猪俣直は真田氏の名胡桃城を攻撃し、これを奪取した。秀吉は北条氏の行為を関東・奥羽懇意無事令違反とみなし、諸国に動員令を発し、天正18(1590)年3月、関東に侵攻を開始、7月に小田原北条氏を滅ぼされた。

名胡桃城は秀吉の関東侵攻のきっかけを作った城である。

## 7. 近世・近代

**沼田藩** 天正18(1590)年8月の徳川家康の関東入部に伴い、真田信幸(信之)が沼田城に封ぜられ、沼田領27000石の領有を認められた。以後、信利に至る5代約90年間、利根郡の村々は沼田藩領として推移する。

信利の代の「寛文朱印留」によれば沼田藩領3万石のうち、利根郡は95村、18223石9斗3升8合である。「寛文郷帳」でも、他に寺領50石があるものの同村数・同高であり、田方4210石8斗8升7合、畠方14013石5升1合と畠方が圧倒的に多かった。これが挂額高であったが信利は寛文初年、藩領一円に検地を行い、14万石余(一説に16万石余)に拡大した。幡谷村(現・片品村内)などの例でみると総反別はそれほど違わず高が6倍以上となっており、田畠の格付と石盛の違いによる打出しがあった。年貢取立ても厳しく、沼田藩領の村は疲弊した。信利は天和元(1681)年11月に改易されるが、直後の12月に上川場村(現・川場村内)が幕府代官所に出した「救済願」(川場村教育委員会保管)には、「屋並に屋さがしを被成、種物あわひへ御取立」「もはや餓死にて四拾五人死申候」と、その窮状が記されている。

真田氏改易後の利根郡は幕府領となった。貞享元(1684)年から旧領の再検地が行われ、利根郡の村高合計は30758石9斗7升3合となり(「貞享二年旧真田領村高書上控」)、この村高がのちの基本となった。この検地に際して分村があり、村数は117となった。「元禄郷帳」でも同高・同村数である。

元禄16(1703)年、本多正永が沼田に入封し、利根内郡の村々の過半は再び沼田藩領となったが、それ以外は幕府領と旗本領に分れた。以後、沼田入封者の領知高が異なることもあって、沼田藩領のほか幕府領・旗本領が分散・錯綜して幕末に至っている。また、一時的に上里見藩領となった村もある。

『天保郷帳』では117村、30899石8斗8升9合9勺となっている。なお沼田藩領では天明元(1781)年、見取騒動が起こっている。

**近世の交通路** 戦国期には重要な役割を果した清水峠越往還は、寛永年間(1624~44)に湯檜曾村(現・みなかみ町内)に口留番所が設置され、近隣村民の止むを得ない用事のための往来を認める以外、すべての交通が停止された。そのため越後との往還は三国街道一本に絞られ、同街道の重要性はいよいよ増大した。高崎宿で中山道から分岐した同街道は中山宿(現・高山村内)を経て、利根郡内に入り、塙原宿(現・みなかみ町月夜野)――今宿――布施宿――須川宿――相俣宿――猪ヶ京宿――永井宿(以上、現・みなかみ町内)を通って、三国峠に至った。猪ヶ京には関所が置かれていた。江戸時代を通じて様々な物資が峠を越えて運ばれたが、上野国にとって特に重要であったのは越後からの米であった。永井宿には米市が立ち、上野国側宿駅の飯米保持の役割を果した。また同街道は越後諸藩の参勤交代路であり、佐渡奉行・新潟奉行も往来した。

会津街道も前代に引続いて用いられたが、裏街道であるため武士の通行はなく、庶民の往来と物資輸送の道であった。関所は戸倉(現・片品村)に置かれていた。会津から上州に入る荷は木材・酒・塩・蚕種が主であった。利根郡は山地が多いいため米の収穫は少なく、ほとんどの村では米を買入れていたと言う。

郡内および他郡との交流の道としては、主なものとして沼田藩主の参勤交代路でもあった沼田街道と大間々街道(根利道)が挙げられる。大間々街道は赤城山の北麓から東麓を通って大間々(現・みどり市大間々)に至るもので、会津から入った荷や東入地域を主とした郡内の織などが大間々に運ばれた。これら街道上の宿村や馬廻場であった村では荷の継送をめぐってたびたび紛争があつた。

**近世の産業** 前述のように利根郡の大半は山岳地帯に属し、耕地も畑が多かった。畑では様々な作物が植えられたが、西入では主に煙草、東入南部では主に養蚕、東入北部では山林業が盛んであった。

西入の煙草は、「沼田煙草」の名で江戸に向けて出荷されていて、明和2(1765)年頃から上野国内の市場でも取引されるようになり、江戸時代後期には、上総・下総

方面でも売買されるようになった。

この他の特産品としては、生枝村(現・沼田市、旧・白沢村内)、門前組(現・川場村内)などの漆、尾合村・岩室村(現・沼田市、旧・白沢村内)の串串、根利村(現・利根村内)や小日向村(現・みなかみ町内)の砥石などがあげられる。

鉱山は柿平村(現・利根村内)など各所にあった。林場は赤城山北麓、川場山(現・川場村内)、尾瀬山一帯(現・片品村内)、谷川岳・阿能川山・藤原山・三峰山(現・みなかみ町内)などにあったが、入会権をめぐる紛争は絶え間なく、赤城山麓生越野(現・昭和村内)のように新畠開発に伴うものもあった。

**幕末維新期の動乱** 幕末維新期、沼田藩は藩主土岐頼之は、会津藩主松平家と姻戚関係にあったが、結局、薩長側に与した。慶応4(1868)年3月、新政府軍東山道總督府が高崎に置かれ、閏4月、足利藩兵・前橋藩兵が相次いで沼田に入ると、沼田藩兵はとともに会津街道方面へ転戦した。5月、戸倉村において新政府軍と会津軍の戦いがあり、戸倉集落は焼かれ戸倉関所も焼失した。

この年の初めから渋川周辺で始まった打撃は次第に北上し、3月には沼田に入った。攻撃の主たる目標は質屋で、塙原宿では質屋が焼払われるなど各地で頻発した。

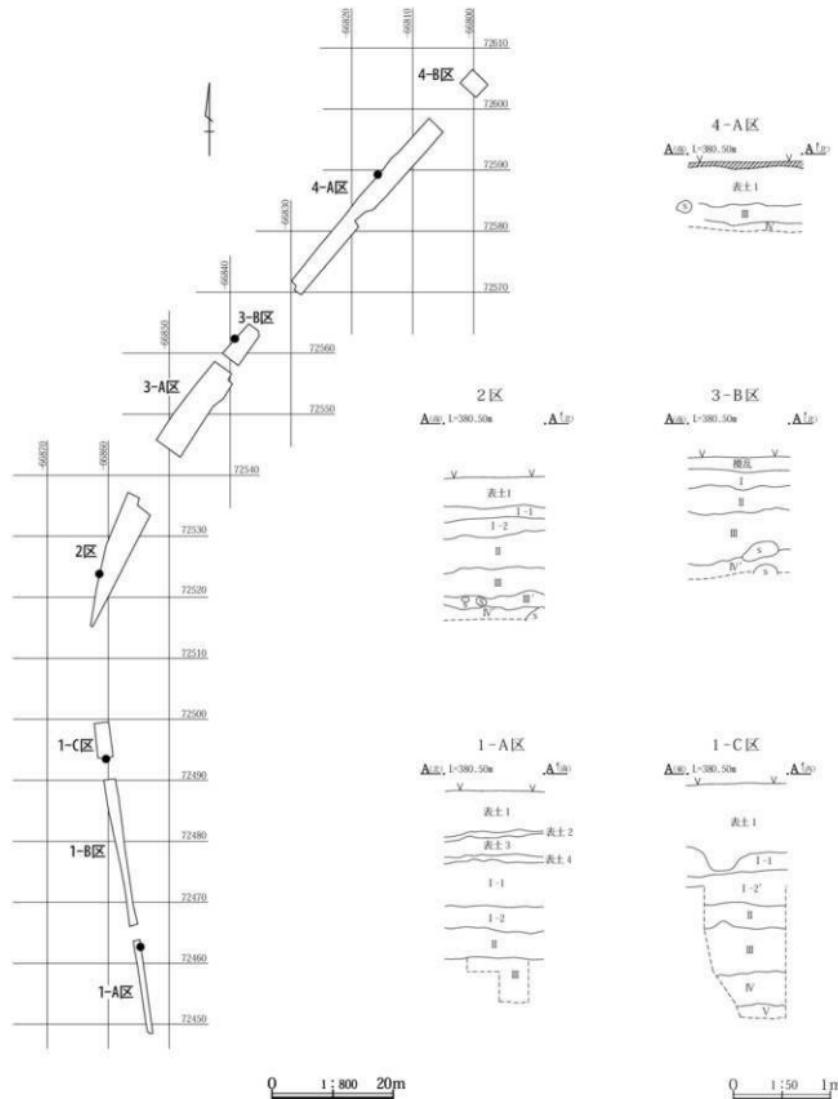
### 第3節 基本土層

基本土層は、1-A区、1-C区、2区、3-B区、4-A区(記録箇所は第5図に図示)において記録した。

表土1	褐色土(10YR4/4)礫を多く含む。
表土2	灰黄褐色土(10YR6/2)砂層。造成に伴う客土。
表土3	灰黄褐色土(10YR4/2)HR-FP以外の層も含む。
表土4	鈍い黄褐色土(10YR4/2)昭和40年代頃までの水田耕土。
I-1層	暗褐色土(10YR3/3) HR-FP(最大径1cm程度)混土層。
I-1'層	暗褐色土(10YR3/3) I-1層に類似するが、含まれるHR-FPが少ない。
I-2層	黒褐色土(10YR2/3) I-1層に類似するが、やや暗い色調を呈する。HR-FP(最大径2cm程度)混土層。
I-2'層	黒褐色土(10YR2/3)色調はI-2層と同じ。含まれるHR-FPが少ない。
II層	灰黄褐色土(10YR5/2) HR-FP(径1~5cm程度)の一次堆積層。
III層	黒色土(10YR2/1)HR-FP直下の黒色土。肌理細やかな粒子で、粘性やや有り。
III'層	黒色土(10YR2/1)色調はIII層と同じ。拳大~径20cm程度の礫を含む。
IV層	鈍い黄褐色土(10YR4/3)III層からV層への漸移層。人頭大の礫を多く含む。
IV'層	鈍い黄褐色土(10YR4/3)色調はIV層と同じ。礫をあまり含まない。
V層	褐色土(10YR4/6)ローム層。

### 第2章参考文献

- 青木裕美ほか2012「駿国史—上州の150年戦争—」、上毛新聞社
- 井上定幸・近藤義雄・西垣晴次編 1988 「角川日本地名大辞典10 群馬県」、角川書店
- 京都大学文学部国語学国文学研究室編1968 「諸本集成倭名類聚抄」本文篇 堀川書店
- 群馬県1938「上毛古墳総覧」
- 群馬県教育委員会編1974「鏡石古墳発掘調査報告」
- 群馬県教育委員会編1988「群馬県の中世城跡」
- 群馬県教育委員会編2017「群馬県古墳総観」
- 群馬県史編纂委員会編1983「群馬県史」資料編3
- 群馬県史編纂委員会編1986「群馬県史」資料編2
- 群馬県史編纂委員会編1990「群馬県史」通史編1
- 群馬県史編纂委員会編1999「群馬県史」資料編6
- 群馬県史編纂委員会編1999「群馬県史」資料編7
- 群馬県総務部市町村課編2015「平成27年度群馬県市町村要覧」
- 群馬県文化事業振興会編1977「上野国村村志」1
- 群馬県理叢文化財調査事業團編1986「糸井古前道路」II
- 群馬県理叢文化財調査事業團編1989「伊崎橋詰・樹海戸・高野原道路」
- 群馬県理叢文化財調査事業團編1999「群馬県道路大事典」
- 昭和村教育委員会編1994「貝野瀬中泉坂ノ上道路」
- 昭和村教育委員会編1994「川原郷原Ⅱ道路」
- 昭和村教育委員会編1995「糸井太夫道路」
- 昭和村教育委員会編1996「昭和村村内道路」1
- 昭和村教育委員会編1996「川原郷原Ⅰ道路」
- 昭和村教育委員会編1998「森下中田道路」
- 昭和村教育委員会編2004「大貫原道路」
- 昭和村教育委員会編2015「岩下清水古墳群」II
- 昭和村教育委員会編2018「糸井太夫道路」II
- 竹井弘幸1998「利根川水系片品川流域の地形変遷史-赤城山の活動とその影響について」(『地理学評論』第71巻A-11号)
- 竹井弘幸2008「利根川中上流域の段丘」(日本地質学会編『日本地方地質誌』関東地方、朝倉書店)
- 沼田市史編さん委員会編1995「沼田市史 資料編1 原始古代・中世」
- 沼田市史編さん委員会編2000「沼田市史 通史編1 原始古代・中世」
- 山崎一1971・72「群馬県古城跡の研究」上、群馬県文化事業振興会マッピングぐんま・道路マップ  
<http://mapping-gumma.pref.gunma.jp/pref-gumma-iseki/Portal>



第5圖 基本十層圖

## 第3章 発見された遺構と遺物

本遺跡では、6世紀中葉に榛名山から噴出したHr-FP下面を1面、ローム漸移層を2面として遺構検出に努めた。

先述した通り、調査は、各調査区を横断する生活道路によって南から北東に向かって1~4区に分割し、さらに各調査区内を横切る水道引込線等を、調査区に面した民家の生活確保上、撤去することが出来なかつたため、さらに1区を1-A~C区に、3区を3-A・B区に、4区を4-A・B区に細分して調査を行つた。

発掘調査は、まず1区から着手した。1-A区1面から中近世の土坑1基、1-A区の北側に隣接する1-B区の1面から古墳時代後期の竪穴建物1棟・土坑2基・ピット3基が検出された。なお、1-A・B区いずれも2面の遺構は検出されず、1-B区の北側に隣接する狭小な1-C区からは1・2面いずれにおいても遺構は検出されなかつた。

次に3区の調査に着手した。3-A区1面から中近世の集石1基、2面から縄文時代中後期の土坑2基が検出された。3-A区の北東側に隣接する狭小な3-B区からは1・2面いずれも遺構は検出されなかつた。

さらにその次に2区の調査を行い、1面から中近世の集石1基を確認した。2面からは遺構は検出されなかつた。

最後に4区の調査に着手した。4区ではHr-FPの一次堆積層が確認できず、Hr-FP混土層となっていたため、1・2面の分別が付きにくかつたが、4-A区では1面相当の遺構として古墳時代後期の井戸・土坑各1基を、また、2面相当の遺構として縄文時代中後期の土坑2基が検出された。4-A区の北東側に隣接する狭小な4-B区からは1・2面共に遺構は検出されなかつた。

今回の調査で検出した遺構は、古墳時代後期の竪穴建物1棟、縄文時代中後期と古墳時代後期及び中近世の土坑計8基、古墳時代後期のピット4基、古墳時代後期の井戸1基、中近世の集石2基等で、出土遺物量は、遺物収納箱4箱であった。調査範囲内からは、弥生時代~古墳時代中期と、奈良・平安時代の遺構は発見されておら

ず、今回の調査範囲においては、それらの時代における土地利用の様態については、不明である。

以下では、遺構の年代順に、検出された各遺構について述べる。なお、検出された遺構については、第2表検出遺構一覧表にまとめた。また、出土した遺物の詳細については、第5表 遺物観察表も併せて参照されたい。

### 第1節 中近世の遺構と遺物

本遺跡において検出された中近世の遺構は、1-A区1面から検出された土坑1基と、2区・3-A区の共に1面から各1基検出された集石遺構である。

1-A区1面から検出された1号土坑はHr-FP混土層を掘り込んでいた。また、2区及び3-A区から検出された2基の集石遺構は、方形ないし橢円形状に埋め込まれた小砾の上面に大型蝶が配置されていることから、石塔などの基部もしくは、建物の礎石である可能性が高いものと考えられるが、用途・機能等については不明である。

調査範囲が狭く、遺構数が少ないので、本遺跡における中近世の土地利用の在り方については不明な点が多いと言わざるを得ない。

#### 1. 1号土坑(第7図、PL.2)

**調査区** 1-A区

**検出面** 1面

**位置** 調査区の北寄り。調査区西壁に懸かる。X = 72459~460、Y = -66854~855。

**重複** なし。

**主軸方位** N-0°

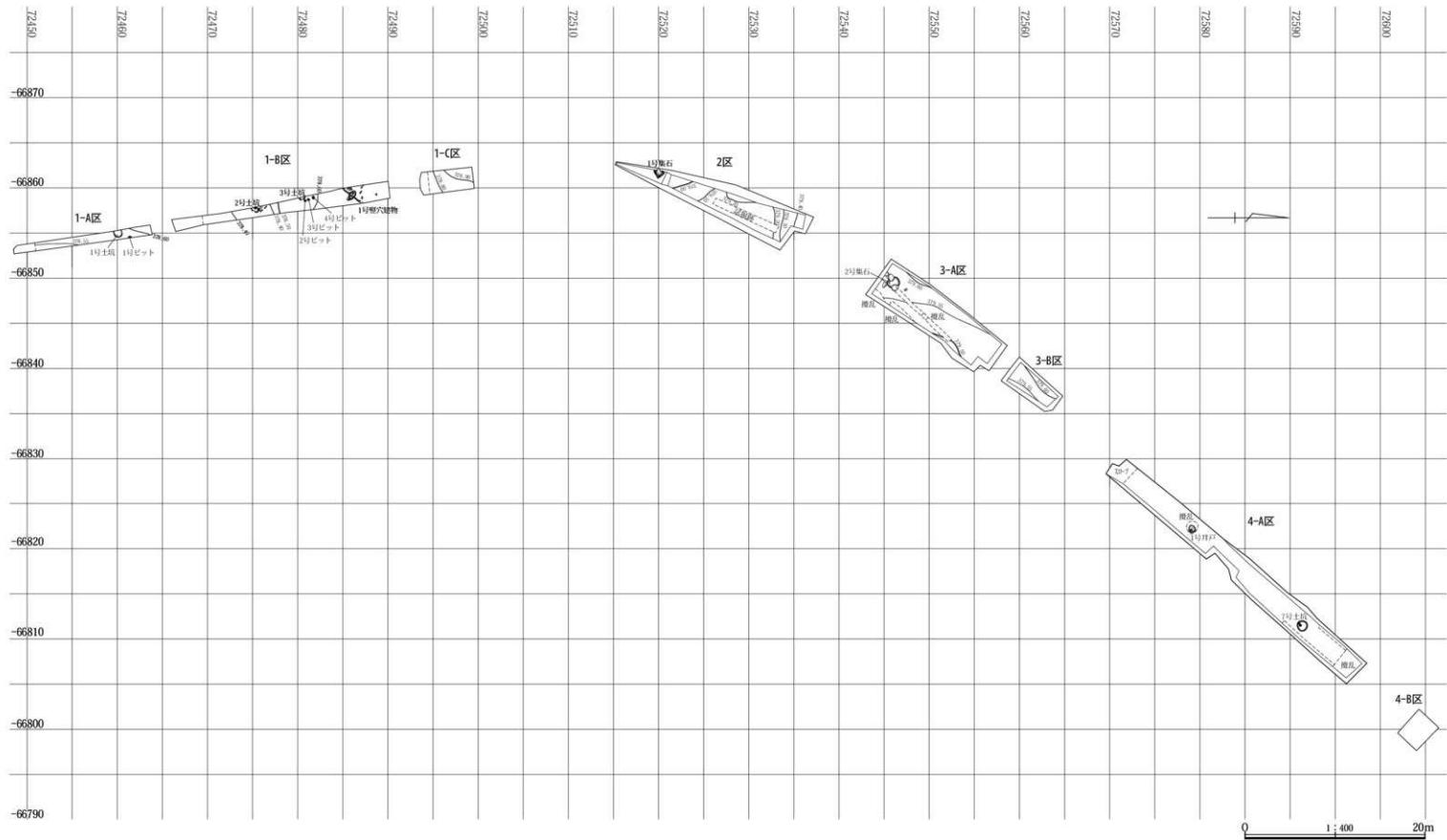
**規模** 検出全長0.92m、検出土幅0.75m、検出下幅0.69m、深さ0.59m。

**平面形状** 西側が調査区外に出ているため全容は不明ではあるが、ほぼ円形状を呈していたものと推測される。

**断面形状** 長方形状に極めて近い隅丸台形状を呈する。

**埋土** Hr-FP及び径10cmまでのロームブロックを斑状に含み、固く締った暗褐色土。

## 1面全体図



第6図 1面全体図

第2表 検出遺構一覧表

面	区	遺構名	位置	計測値	遺物	時期	
1面	1-A	1号土坑	調査区の北寄り。西壁に面する。	検出土全長0.92m、検出上幅0.75m、検出下幅0.69m、深さ0.59m	なし	中近世	
	2	1号墓石	調査区の南寄り		1.05×1.05m	なし	中近世
	3-A	2号墓石	調査区の南寄り		長径0.07m、短径1.79m、幅方の深さ0.25m	なし	中近世
	1-A	1号馬の遺物	調査区の北端付近	東・西・南側いずれもが調査区外に出たため不明		調査片1、発見器科金屬部～飼料～飼料片1、鑑別片1。	6世紀後半
	1-B	2号土坑	調査区の中央、南北り	検出土全長1.82m、検出上幅0.59m、検出下幅0.48m、深さ0.32m	中近世の土器片1、鑑文時代中期土器片2(いざれむし形規範)	6世紀後半	
	1-B	3号土坑	調査区の中央、南北に面する	検出土全長0.65m、検出上幅0.35m、検出下幅0.22m、深さ0.34m	なし	6世紀後半	
	4-A	7号土坑	調査区の北寄り	全長1.15m、上幅1.12m、下幅0.90m、検出断面内の深さ0.71m	鑑文時代中期～後期前葉の土器片26、鑑片1(形規範)	6世紀後半	
	4-A	1号井戸	調査区の南東寄り	長1.60m、上幅0.71m、下幅0.40m、検出断面内の深さ0.71m	理工より土器断面～制御部片1、この他、鑑文中期後葉和E3人土器片1、鑑文後期初期名古山式土器片2、鑑文後期前葉加曾和B人土器片1、鑑文後期新須名寺式土器片2	6世紀後半	
	1-A	1号ビット	調査区の北寄り、東壁に面する	検出土長0.34m、検出上幅0.17m、深さ0.6m	なし	6世紀後半	
	1-B	2号ビット	調査区のはば中央	長1.60m、上幅0.17m、深さ0.22m	なし	6世紀後半	
1-B	3号ビット	調査区のはば中央、西壁寄り	長1.60m、上幅0.17m、深さ0.31m	なし	6世紀後半		
1-B	4号ビット	調査区のはば中央、西壁寄り	長1.60m、上幅0.28m、短幅0.21m、深さ0.18m	なし	6世紀後半		
3-A	4号土坑	調査区の南東寄り	長1.60m、上幅0.64m、下幅0.52m、深さ0.17m	鑑文時代中期後葉～後期前葉の土器片5(後期初期須名寺式土器片2)	6世紀後半		
3-A	5号土坑	調査区の南東寄り	長1.60m、上幅0.78m、下幅0.47m、深さ0.26m	3、中後葉～後期前葉2	6世紀後半		
4-A	6号土坑	調査区の南端付近	長1.60m、上幅1.01m、下幅0.68m、深さ0.48m	鑑文時代中期後葉～後期前葉の土器片5	6世紀後半		
2面	4-A	8号土坑	調査区の中央付近、東寄り	検出土長2.19m、検出上幅0.61m、検出下幅0.37m、深さ0.49m	鑑文時代中期後葉～後期前葉の土器片127(中期後葉須名寺式土器片5、同加曾和E3人土器片56、同加曾和E4人土器片11、後期新須名寺式土器片13、中期後葉～後期前葉土器片162)。	6世紀後半	

遺物 なし。

所見 比較的小規模ながらもしっかりとした掘方を有する深い土坑で、用途や機能は不明である。壁面は垂直に近い状態で立ち上がっているため、断面はほぼ長方形状と言っても良い逆台形状を呈している。

土坑周辺部の標高は378.54m前後、坑底の標高は

377.99m前後である。

時期 中世のものと考えられる。

## 2. 1号集石(第8図、PL. 2)

調査区 2区

検出面 1面

位置 調査区の南端寄り。調査区西壁に懸かる。X = 72519~520、Y = -66861~862。

重複 なし。

主軸方位 N-25°-W

規模 検出南北長1.05m、検出東西長1.05m、掘方の深さなし。

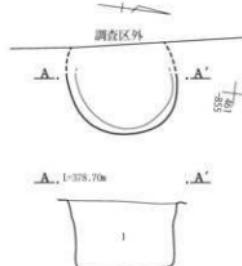
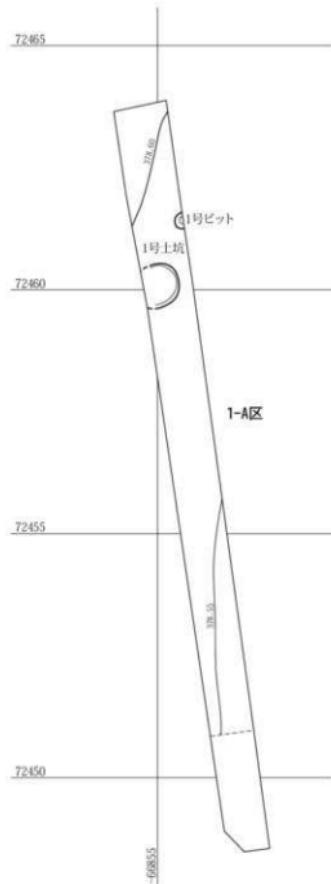
平面形状 西側が調査区外に出ているため全容は不明ではあるが、東西に長い梢円形状を呈していたものと推測される。

断面形状 掘方は検出されなかった。

埋土 地山直上に直接、石が置かれているため、埋土はない。

遺物 なし。

構成石数 30。



1-A区 1号土坑  
1. 墓褐色土(10YR3/4) Hr-EP及び径10cmまでのロームブロックを斑状に含む。固く紡まる。

第7図 1-A区1面全体図、1号土坑

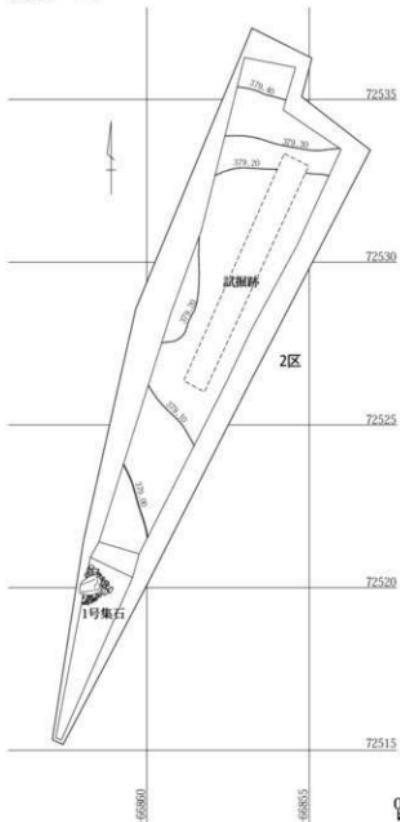
**所見** 東西方向に長い長径0.74m、短径0.61mの比較的大きな石塊を中心に、その周囲に幅0.1~0.35m前後で礫を敷き並べる。地山面上に巨石とそれを取り巻くかのように礫が方形状に並べられている状態である。墳墓とも考えられるが、掘方は検出されず、遺構の性格は不明であるが、石塔などの基部もしくは建物の礎石である可能性が想定出来る。

**時期** 中近世のものと考えられる。

### 3. 2号集石(第9図、PL. 3)

**調査区** 3-A区

**検出面** 1面



**位置** 調査区の南端、中央。南壁に懸かる。X = 72544 ~546、Y = -66848~850。

**重複** なし。

**主軸方位** N-37°~E

**掘方主軸方位** N-15°~W

**規模** 検出南北長2.07m、検出東西長1.79m。

**掘方規模** 長径1.33m、短径1.15m、深さ0.25m

**平面形状** 全体に、北東~南西方向に長い楕円形状を呈していたものと推測される。

**断面形状** 掘方の断面はやや厚いレンズ状を呈している。

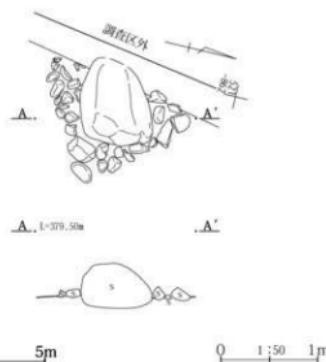
**掘方埋土** 締まりの弱い黒褐色土中に、Hr-FPを少量含む。

**遺物** なし。

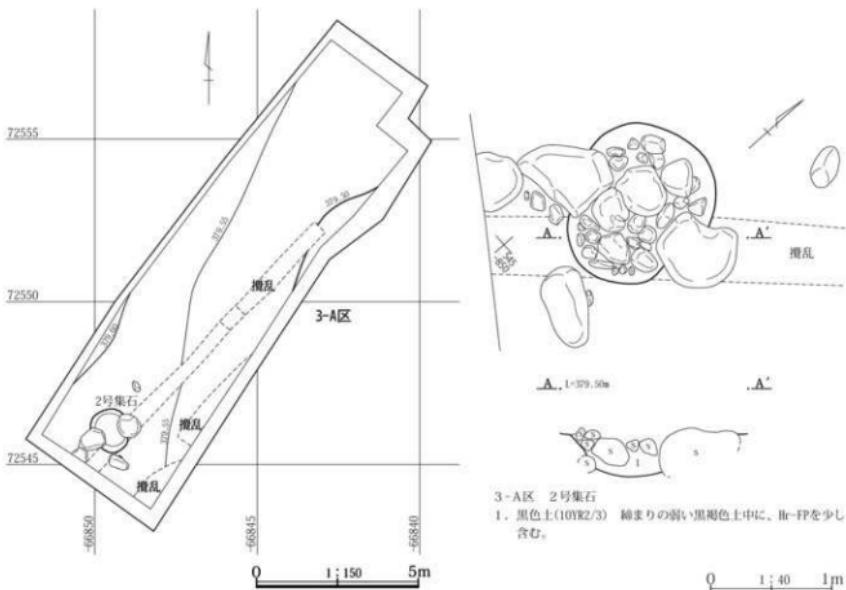
**構成石数** 34。

**所見** 上面を攢乱されている。長径1.33m、短径1.15m、深さ0.25mの掘方の中に、径約0.4mの石塊を中心に、その周囲に幅0.04~0.45m前後の大小の礫を楕円形状に敷き並べている。外周には、径0.6m前後の大きな石塊を配するが、全体的には整然と配置された状況ではなく、南側及び東側に飛び出した石塊の一部は原位置ではない可能性が高い。遺構の性格は不明であるが、1号集石と同様、石塔などの基部もしくは建物の礎石である可能性が高いものと考えられる。

**時期** 中近世のものと考えられる。



第8図 2区 1面全体図、1号集石



第9図 3-A区1面全体図、2号集石

## 第2節 古墳時代後期の遺構と遺物

本遺跡において最も多くの遺構が検出された時期である。古墳時代後期の遺構は、1-A区、1-B区及び4-A区の各1面から検出された。いずれもHr-FPを掘り込んでいる遺構である。

1-A区1面からは1号ピット、1-B区1面からは1号竪穴建物と2・3号土坑、2~4号ピット、4-A区からは1号井戸と7号土坑が検出された。古墳時代後期の遺構は1-B区1面及び4-A区1面に集中している。

1-B区1面検出された1号竪穴建物は、本遺跡から検出された唯一の竪穴建物であるが、調査区が限定されていたため、建物の全容は不明であり、遺物の出土は極めて少ない。

土坑及びピットは1-B区1面から多く検出されている。また、本遺跡から検出された唯一の井戸である1号井戸は、調査範囲の北東側4-A区から検出された。ピットはいずれも径0.2m前後の小規模な穴であり、用途・

機能は不明である。

本遺跡において、最も多くの遺構が検出された時期とはいって、客観的に見れば検出された遺構数自体は少ないものの、調査範囲南端の1-A区から調査範囲北東側の4-A区に亘る延べ約157mの範囲に遺構が点在しており、古墳時代後期には、この地には集落的な景観が存在していた様子が伺える。

### 1. 1号竪穴建物(第11・12図、PL. 4・11)

**位置** 1-B区の北端付近。3号土坑及び2~4号ピットの北側に位置する。X=72485~490、Y=-66858~860。

**重複** なし。

**平面形状** 東・西・南側がいずれも調査区外に出るために、全容は不明である。

**主軸方位** N-37°-E

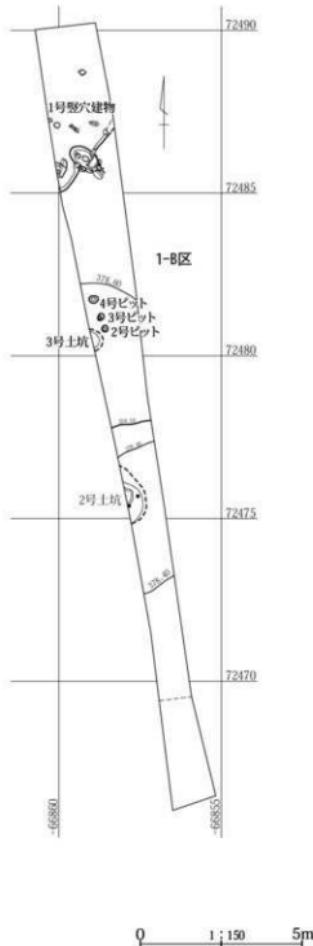
**規模** 東・西・南側がいずれも調査区外に出るために不明。床面までの深さ約0.39m。確認面の標高は378.62~

68m、床面の標高は378.34~39m。

**検出面積** 8.288m<sup>2</sup>。

**埋土** 上層にHr-FPを少量含む暗褐色砂質土と砂主体で下面にHr-FPを含む灰褐色砂質土が堆積する。主体となるのはHr-FPを少量含み、粘性が強い鈍い黄褐色土。

**床面** 地山を比較的平坦に削り出して床面を形成している。



第10図 1-B区1面全体図

る。床面上には炭化物が見られ、中央部において焼土及び炭化物の検出が顕著な範囲がある。壁高は約0.5m前後で、ほぼ垂直に立ち上がる。

**竈** 検出範囲においては南東壁の中央に位置する。竈の主軸方位はN-52°Wで、北西—南東方向である。残存状態はあまり良くない。全長1.09m、焚口の幅0.42m、燃焼部幅0.35m、燃焼部は壁の外側に突出しており、良くなっている。

竈の燃焼部は粘土によって構築され、天井部を含めて自然石が組まれている。左右両袖の芯材の石も原位置を保っているものと考えられるが、構築材と考えられる自然石の一部は散乱しており、竈が人為的に破壊された状況を示しているものと考えられる。

焚口部から燃焼部の底面にかけては、建物床面よりも僅かに低くなり、煙道部は斜めに立ち上げている。

**貯蔵穴** 調査範囲においては検出されなかった。

**柱穴** 調査範囲においては検出されなかった。

**周溝** 調査範囲においては検出されなかった。

**掘方** 全体に地山は比較的平坦に削り出されており、竈以外の部分では掘方は検出出来ず、掘方と床面とは一致している。

竈前付近に若干、掘り窪められている箇所があるが、床下土坑という程のものではなく、単なる掘削時の凹凸と見られる。

竈の造り替えの痕跡も全く見出すことは出来なかつた。

**遺物** 出土した遺物量は然程に多くはない。8点を図化して掲載した。

竈の焚口前東側の床面より0.138m上、標高378.541mの位置からは鐵滓が1点出土した(第12図1)。また、埋土中から須恵器羽釜口縁部~鈎片1点(第12図2)、輪羽口片1点(第12図3)が出土した。須恵器羽釜片は、この竈穴建物自体の年代よりは新しい時期の遺物であり、輪羽口片や鐵滓などと共に、近くに存在が想定される鍛冶遺構に伴う遺物が混入したものとみられる。

また、竈埋土中から出土した繩文土器(加曾利E式)深鉢胴部片2点(第12図4・5)、埋土中から出土した繩文土器(加曾利E式)深鉢胴部片1点(第12図6)、珪質頁岩製打製石斧片1点(第12図7)、粗粒輝石安山岩製磨石1点(第12図8)を図化・掲載したが、いずれも混入した遺

物と考えられる。

本竪穴建物からは、上記の他に竪から土師器甕、壺、埋土中から須恵器杯蓋の小片が出土しているが、すべて小片のため図示・掲載することが出来なかった。

土師器甕は1cm大から10cmまでの胴部片12片が出土している。そのうち、比較的残存の大きな破片は、胴部下位片で外面は縱削りと横削りの箇割りが観察できることから底部に近い部位と判断できる。壺は3cm角の破片ではあるが、内面に箇磨きが施されていることから壺と判断できる。須恵器杯蓋は口縁部端部が折り曲げられており、酸化焰焼成のため色調が褐色を呈している。なお、出土した土器片には土師器のわりには硬質に焼成されたものが存在するのが特徴である。

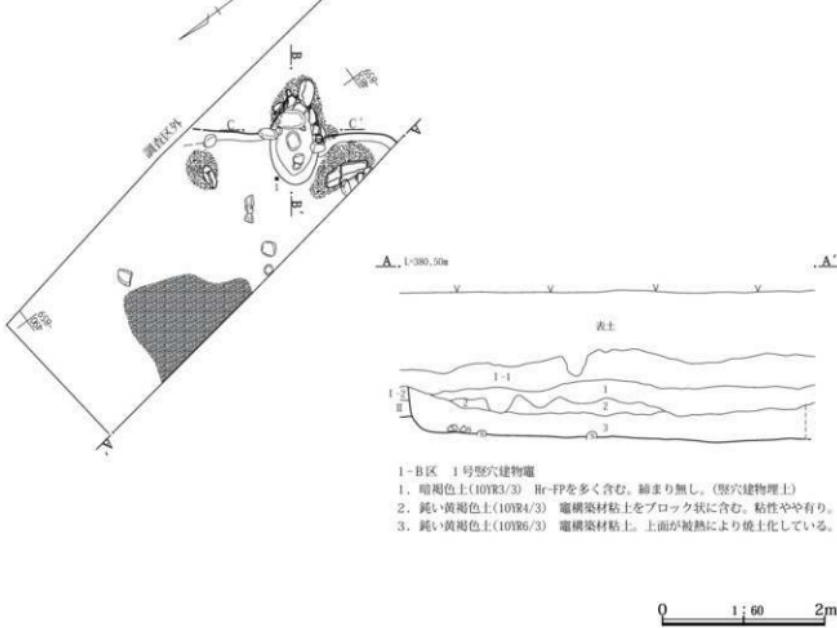
また、非掲載ではあるが、本竪穴建物から出土した石器・石製品としては、黒色頁岩製の削器片1点がある。時期的に、本竪穴建物に伴うものとは考えられず、混入

した遺物と考えられる。

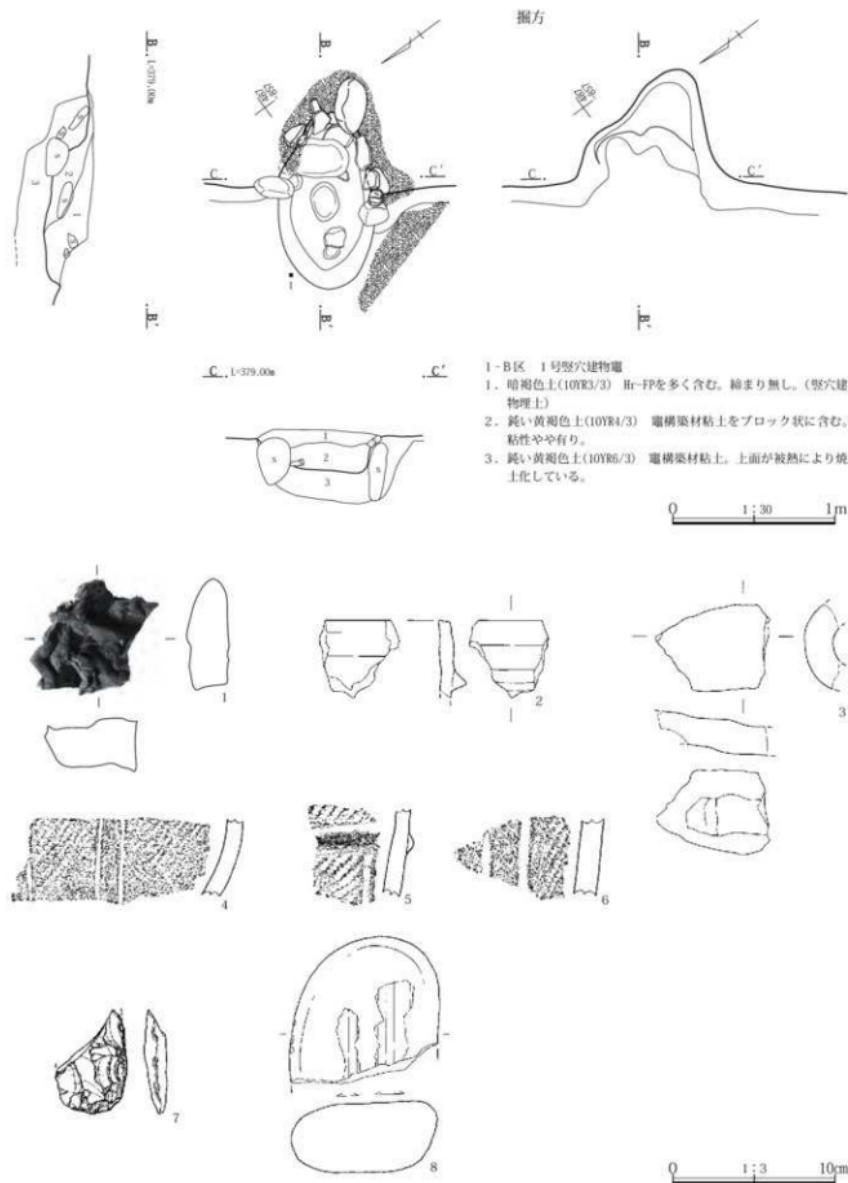
**所見** 本跡地唯一、検出された竪穴建物であるが、狭い道路幅の範囲でしか調査できなかつたため、竪と、竪が取り付く南東側壁の一部しか調査出来なかつた。竪穴建物の壁は、南東側壁しか検出することが出来ず、北西側壁、北東側壁、南西側壁いずれも調査区外であるものと考えられる。北西-南東の長さは少なくとも約3.7m以上の規模になるものと推測される。

床面直上からは炭化材が複数検出されたことから焼失家屋と考えられる。竪は、両側の袖石が良好な状況で検出され、複数の自然礫を壁面に配置していた。竪からは鉄滓1点などが出土した。

**時期** 共伴する土器の形態が不明瞭ではあるが、Hr-FPを掘り込んで構築していることや、土師器甕と壺の年代観から6世紀後半頃のものと想定出来る。



第11図 1-B区 1面 1号竪穴建物



第12図 1-B区 1面 1号堅穴建物竈と出土遺物

## 2. 2号土坑(第13図, PL. 5)

調査区 I-B区

検出面 1面

位置 調査区の中央、南寄り。調査区西壁に懸かる。X = 72474~476, Y = -66857~858。

重複 なし。

主軸方位 N-11-E°

規模 検出全長1.82m、検出上幅0.59m、検出下幅0.48m、深さ0.32m。

平面形状 西側が調査区外に出ているため全容は不明。

断面形状 やや扁平な逆台形状を呈していたものと思われるが、南側上面を大きく削平されているため、不明である。

埋土 主体となるのは下層程砂粒が多い鈍い黄褐色砂質土。上層にHr~FPと径30mmの大形の川原石を含む粘性のある黒色土が堆積し、底部壁際に鈍い黄褐色粘質土が3角に堆積している。

遺物 非掲載であるが、埋土中より中世の土器片1点、縄文時代中期の土器片が2点出土しているが、いずれも本土坑の年代観とは異なる。

所見 浅い土坑で、用途や機能は不明である。土坑周辺部の標高は378.35~39m前後、坑底の標高は377.30m前

後である。

時期 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。

## 3. 3号土坑(第13図, PL. 5)

調査区 I-B区

検出面 1面

位置 調査区の中央。調査区西壁に懸かる。X = 72480, Y = -66858~859。

重複 なし。

主軸方位 不明。

規模 検出全長0.69m、検出上幅0.33m、検出下幅0.22m、深さ0.34m。

平面形状 西側が調査区外に出ているため全容は不明。

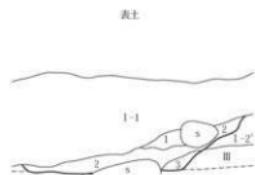
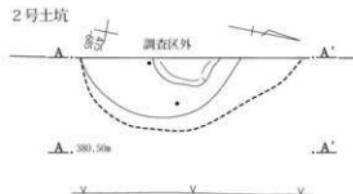
断面形状 逆台形状を呈する。

埋土 砂礫を多く含み、締まりが弱い暗褐色土。

遺物 なし。

所見 比較的浅い土坑で、用途や機能は不明である。土坑周辺部の標高は378.32~48m前後、坑底の標高は377.51前後である。比較的しっかりととした掘方を有しており、壁面は垂直に近い急角度で立ち上がっている。

時期 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。

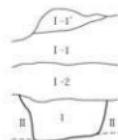


I-B区 2号土坑

1. 黒色土(10YR3/2) Hr-FP、大型の河原石(径30cm)を含む。粘性有り。
2. 鈍い黄褐色砂質土(10YR5/3) 下層ほど砂粒が多い。
3. 鈍い黄褐色粘質土(10YR6/4) Hr-FPを含む。固く締まる。



表土

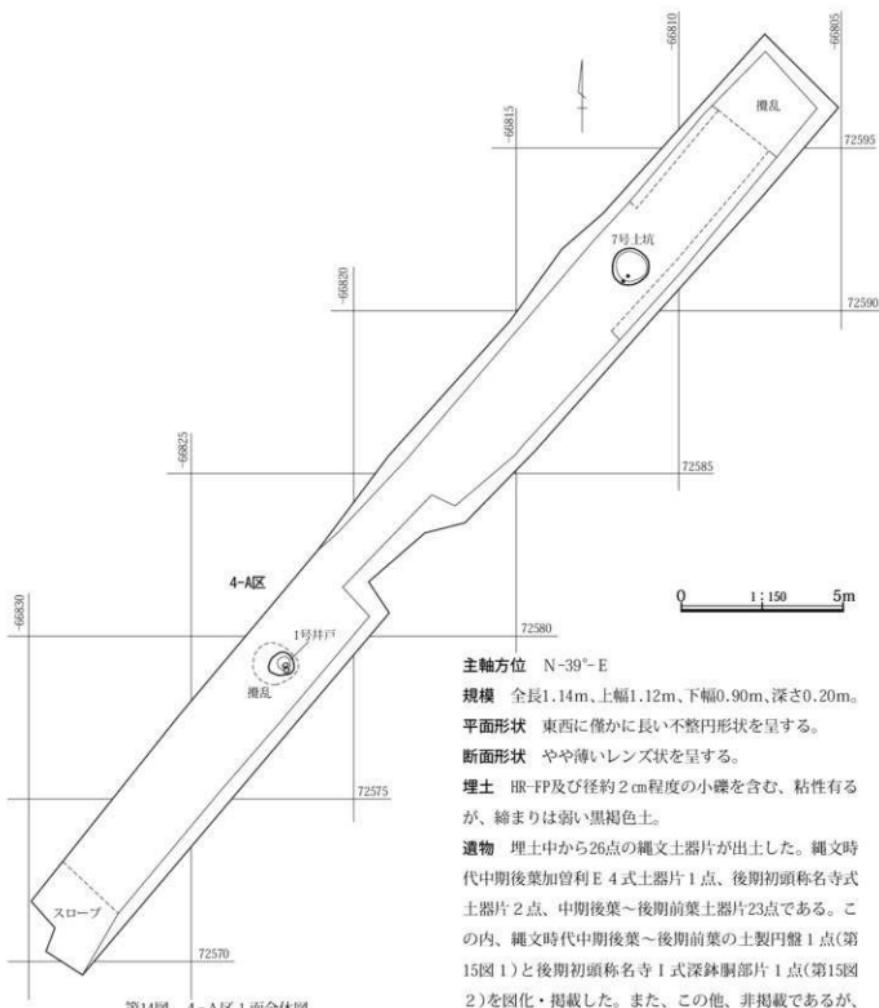


I-B区 3号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/4) 砂礫を多く含む。締まり弱い。

0 1:40 1m

第13図 1-B区1面2・3号土坑



第14図 4-A区 1面全体図

## 4. 7号土坑(第15図、PL. 5・11)

調査区 4-A区

検出面 1面

位置 調査区の北寄り。X=72590~591、Y=-66810~812。

重複 なし。

所見 比較的浅い土坑で、用途や機能は不明である。土坑周辺部の標高は379.19~23m前後、坑底の標高は379.03~05m前後である。掘方は浅い。

時期 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。



第15図 4-A区1面7号土坑と出土遺物

## 5. 1号井戸(第16図、PL. 6・11)

調査区 4-A区

検出面 1面

位置 調査区の南東寄り。X=72578~579、Y=-66821~822。

重複 なし。

主軸方位 N-64°-E

規模 長径0.79m、上幅0.71m、下幅0.40m、検出範囲内の深さ0.71m。

平面形状 東西に長い楕円形状を呈する。

断面形状 上端が広がった漏斗状を呈する。

埋土 上層に拳大の礫を含む、締まり無い暗褐色砂質土、下層には壁の崩落土と考えられる褐色ローム質土が堆積している。

遺物 埋土上層より土師器甕口縁部～胴部片が1点出土(第16図1)。出土位置の標高は378.613m、確認面から約0.18~0.2m前後の位置からの出土である。

この他、埋土中からは繩文土器深鉢胴部片(加曾利E3式)1点(第16図2)、繩文土器深鉢口縁部片(称名寺II式)2点(第16図3・4)、繩文土器深鉢口縁部片(加曾利B2式)1点(第16図5)、繩文土器深鉢胴部片(称名寺II式)2点(第16図6・7)。

所見 本遺跡にて検出された唯一の井戸である。上面を浅く擾乱されている。径が狭く、壁面の崩落も甚だしいため、安全確保のため、確認面から0.71mの部分までしか調査出来なかった。

周辺部の標高は379.95~99m前後、調査した底部の標高は379.20m前後である。しっかりと掘方を有している。

出土した土師器甕口縁部～胴部片は、形態的には古墳時代後期、6世紀後半の年代観が与えられるが、今まで出土している同年代のものと整形がやや異なる。一般的な土師器甕は外側が口縁部横撫で、胴部笠削り、内面が口縁部横撫で、胴部笠撫でによる整形であるが、実測した甕は観察表に記したように胴部を笠削りした後、胴部下位を残して中位から口縁部まで笠撫でしている。また、内面も一般的に口縁部は横撫であるが胴部から口縁部まで笠撫でが施されており、例をみない整形が施されている。

時期 層位及び出土遺物の年代観から6世紀後半頃のものと考えられる。

## 6. 1号ビット(第17図、PL. 6)

調査区 1-A区

検出面 1面

位置 調査区の北寄り。1号土坑の北東側に位置する。

調査区東壁に懸かる。X=72461、Y=-66854。

重複 なし。

主軸方位 不明。

規模 検出長径0.34m、検出短径0.17m、深さ0.64m。

平面形状 東側が調査区外に出るため不明。

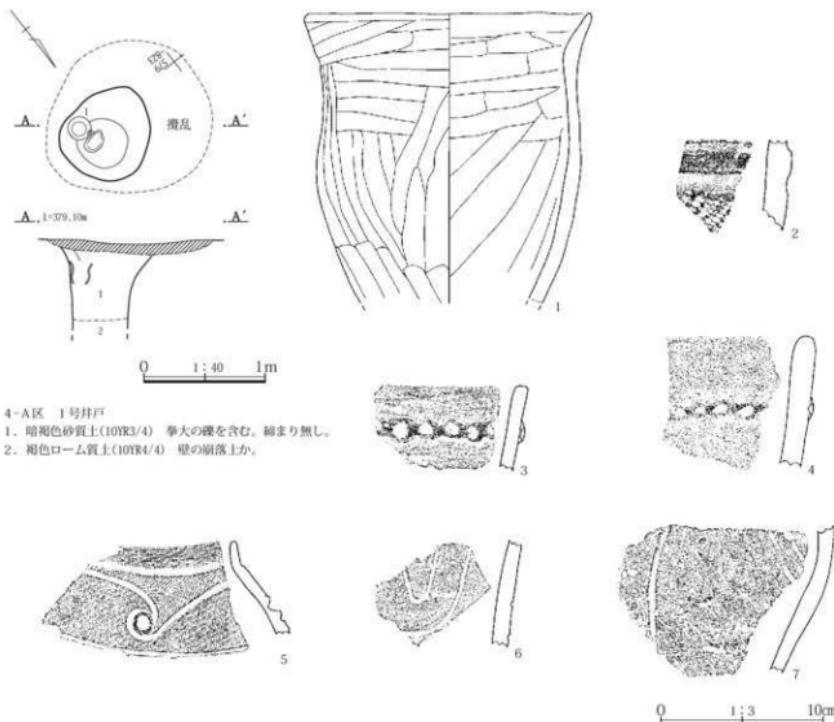
断面形状 上部が少し開いた深いU字形状を呈する。

埋土 HR-FPを含む、締まりの有る黒褐色土。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。ビット周辺部の標高は379.57~59m前後、底部の標高は379.23m前後である。深くしっかりとした掘方を有している。

時期 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。



第16図 4-A区1面1号井戸と出土遺物

## 7. 2号ピット(第17図、PL. 6)

調査区 1-B区

検出面 1面

位置 調査区のほぼ中央。3号土坑の北東側、3号ピットの南側に隣接する。X=72480、Y=-66858。

重複 なし。

主軸方位 N-13°-E

規模 長径0.20m、短径0.17m、深さ0.22m。

平面形状 南北にやや長い楕円形を呈する。

断面形状 U字形を呈する。

埋土 HR-FPを含む、締まりの有る黒褐色土。

遺物 なし。

所見 用途や機能は不明である。ピット周辺部の標高は379.52~54m前後、底部の標高は379.32m前後である。

深くしっかりとした掘方を有している。

時期 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。

## 8. 3号ピット(第17図、PL. 6)

調査区 1-B区

検出面 1面

位置 調査区のほぼ中央。3号土坑の北東側、2号ピットの北側、4号ピットの南側に隣接する。X=72481、Y=-66858。

重複 なし。

主軸方位 N-32°-E

規模 長径0.23m、短径0.17m、深さ0.31m。

平面形状 南北に長い楕円形を呈する。

断面形状 上端がやや広がった深いU字形を呈する。

### 第3章 発見された遺構と遺物

**埋土** HR-FPを含む、縦まりの有る黒褐色土。

**遺物** なし。

**所見** 用途や機能は不明である。ピット周辺部の標高は379.52~54m前後、底部の標高は379.24m前後である。深くしっかりとした掘方を有している。

**時期** 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。

#### 9. 4号ピット(第17図、PL. 7)

**調査区** 1-A区

**検出面** 1面

**位置** 調査区のほぼ中央。調査区西壁寄り。3号土坑の北東側、3号ピットの北側に隣接する。X=72481、Y=-66858~859。

**重複** なし。

**主軸方位** N-0°

**規模** 長径0.28m、短径0.21m、深さ0.18m。

**平面形状** 東西に長い楕円形状を呈する。

**断面形状** 上端が広がったU字形状を呈する。

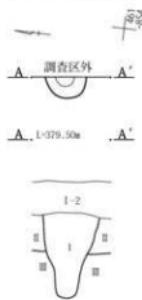
**埋土** HR-FPを含む、縦まりの有る黒褐色土。

**遺物** なし。

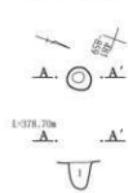
**所見** 用途や機能は不明である。平面形状では本遺跡から検出された最大のピットであるが、比較的浅い。ピット周辺部の標高は379.57~59m前後、底部の標高は379.40m前後である。しっかりとした掘方を有しているが、1~3号ピットに比べると浅い。

**時期** 層位から6世紀後半頃のものと考えられる。

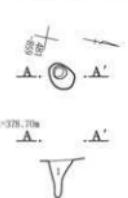
1-A区 1号ピット



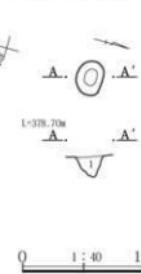
1-B区 2号ピット



1-B区 3号ピット



1-B区 4号ピット



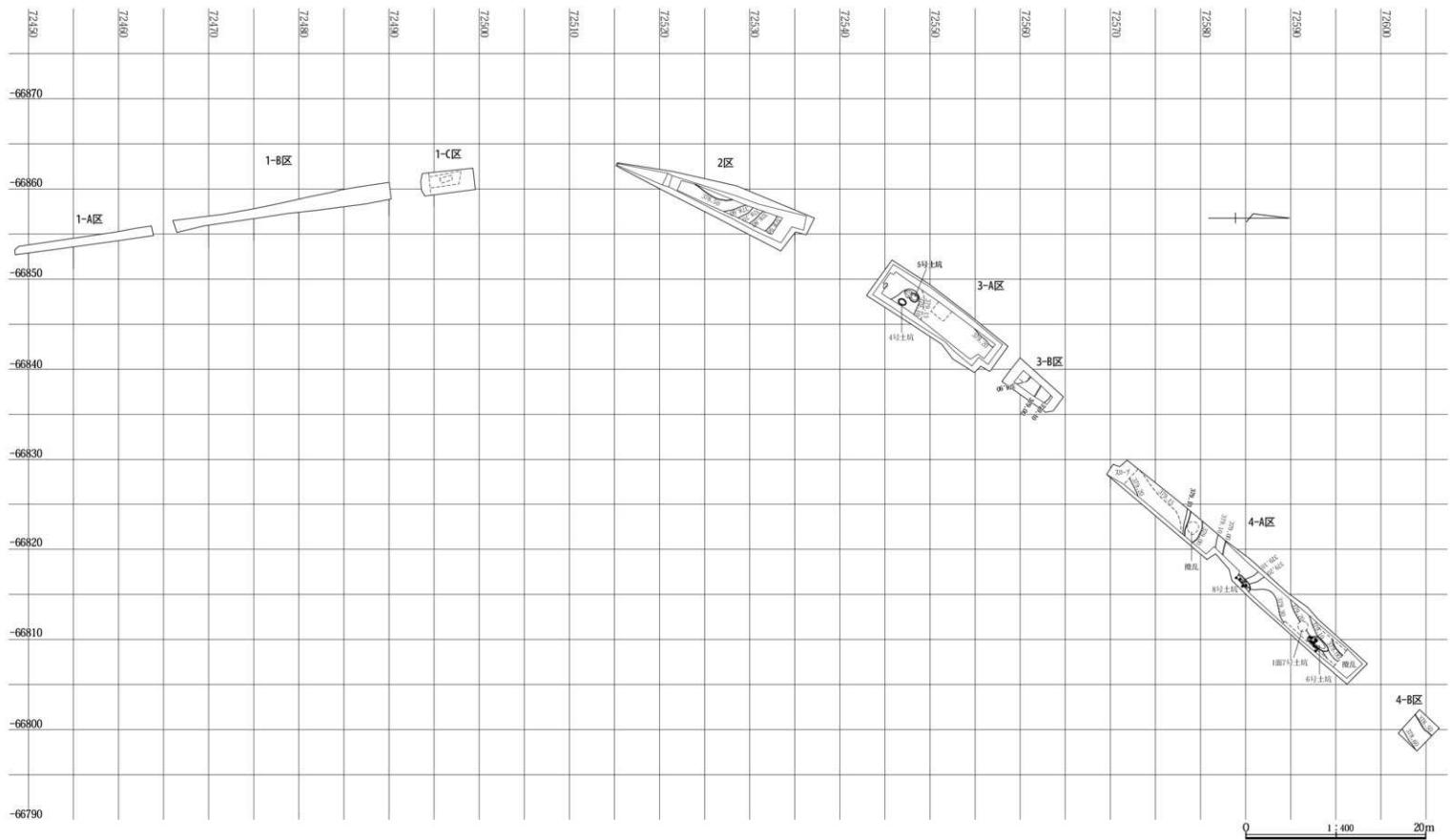
1~4号ピット

I. 黒褐色土(10YR2/3) HR-FPを含む。縦まり有り。

0 1:40 1m

第17図 1-A・B区1面1~4号ピット

2面全体図



第18図 2面全体図

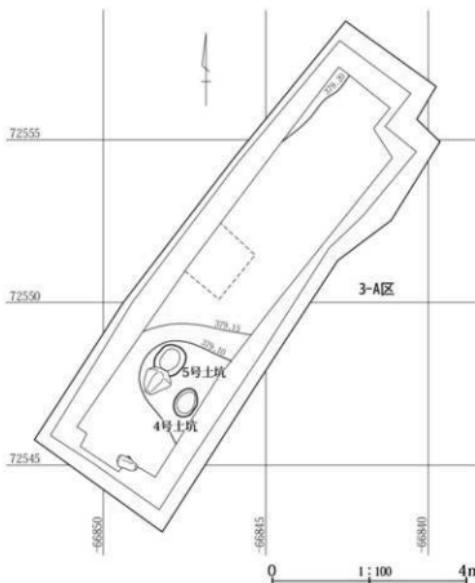
### 第3節 繩文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構はローム漸移層である2面目から検出された。2面から遺構が検出されたのは、3-A区と4-A区の2調査区のみである。

調査区全体において、Hr-FP下の黒色土からローム漸移層にかけて、縄文時代中期～後期の土器片が多数出土した。その一方で、石器の出土は少なかった。

縄文時代の遺構として検出されたのは土坑4基である。3-A区から4・5号土坑の2基、4-A区から6・8号土坑の2基が検出された。3-A区から検出された縄文時代の土坑は径約1m程度の円形の平面形状を呈するもので、小型で、掘方も浅い。4-A区から検出された縄文時代の土坑は、楕円形状を呈し、深く、しっかりととした掘方を有している。

いずれの土坑も、出土遺物から縄文時代中期後葉～後期初頭に帰属するものと考えられる。なお、第3表出土遺構別縄文土器型式内訳表も併せて参照されたい。



第19図 3-A区2面全体図、4号土坑と出土遺物

#### 1. 4号土坑(第19図、PL. 8・11)

調査区 3-A区

検出面 2面

位置 調査区の南東寄り。5号土坑の南東側に隣接する。

X=72546～547、Y=-66847。

重複 なし。

主軸方位 N-25°-E

規模 長径0.91m、上幅0.64m、下幅0.52m、深さ0.17m。

平面形状 北東～南西方向に長い楕円形状を呈する。

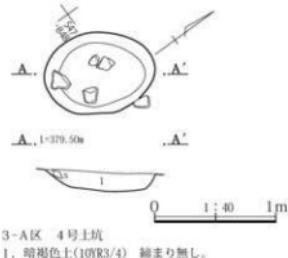
断面形状 浅いレンズ状を呈する。

埋土 細まりの無い暗褐色土。

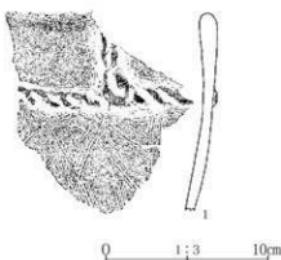
遺物 埋土中から縄文時代中期後葉～後期前葉の土器片5点が出土した。後期初頭名寺式のものが3点、中期後葉～後期前葉のものが2点である。その内、底面から約0.14mの位置、標高379.080mから出土した名寺式の深鉢口縁部片(第19図1)1点を図化・掲載した。

所見 用途や機能は不明である。底面付近から拳大の自然礫が出土。

確認面の標高は379.05～11m前後、底部の標高は



3-A区 4号土坑  
1. 暗褐色土(10VR3/4) 細まり無し。



### 第3章 発見された遺構と遺物

378.94~97m前後である。しっかりととした掘方を有しているが深い。

**時期** 出土遺物から縄文時代後期初頭称名寺式期のものと考えられる。

#### 2. 5号土坑(第20図、PL. 8・11)

**調査区** 3-A区

**検出面** 2面

**位置** 調査区の南東寄り。4号土坑の北西側に隣接する。

X=72547~548、Y=-66847~848。

**重複** なし。

**主軸方位** N-40°-E

**規模** 長径0.82m、上幅0.78m、下幅0.47m、深さ0.26m。

**平面形状** 北東~南西方向に長い楕円形状を呈する。

**断面形状** 浅いレンズ状を呈する。

**埋土** 細まりの無い暗褐色土。

**遺物** 埋土中より縄文時代中期後葉~後期前葉の土器片が6点出土した。後期初頭称名寺式の土器片1点と中期後葉~後期前葉の土器片5点である。内、称名寺I式深鉢胴部片1点(第20図1)を図化・掲載した。

**所見** 用途や機能は不明である。底面及び壁面付近から拳大の自然礫が多数出土。

確認面の標高は379.04~11m前後、底部の標高は378.82~91m前後である。しっかりととした掘方を有しているが深い。

**時期** 出土遺物から縄文時代後期初頭称名寺式期のものと考えられる。

#### 3. 6号土坑(第22図、PL. 9・12)

**調査区** 4-A区

**検出面** 2面

**位置** 調査区の南端付近。調査区南東側壁際。X=72591~594、Y=-66808~810。

**重複** なし。

**主軸方位** N-37°-E

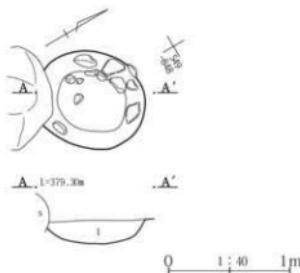
**規模** 長径2.63m、上幅1.01m、下幅0.68m、深さ0.48m。

**平面形状** 北東~南西方向に長い長円形状を呈する。

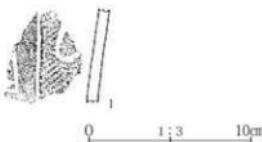
**断面形状** 闊丸逆台形状を呈する。

**埋土** 粘性強く、小礫を含む黒褐色土主体。

**遺物** 埋土及び底面から縄文時代中期後葉~後期前葉の



3-A区 5号土坑  
1. 暗褐色土(10YR3/4) 細まり無し。



第20図 3-A区2面5号土坑と出土遺物

土器片が96点出土した。中期後葉加曾利E2式土器片1点、同加曾利E3式土器片5点、同加曾利E4式土器片11点、後期初頭称名寺式土器片13点、中期後葉~後期前葉土器片62点である。内、下記の12点を図化・掲載した(第22図1~12)。

1(第22図)は南端縁辺部底面直上、標高379.194mから出土したE4式鉢脚部片。

2(第22図)も、南端付近の底面から0.151m上、標高は379.221mから出土した称名寺I式深鉢脚部片。

3(第22図)は、北東縁辺の底面直上、標高379.199mから出土した称名寺式深鉢脚部片。

4(第22図)は、3の直ぐ南側、3と同様、北東縁辺の底面直上、標高は379.025mから出土した称名寺I式深鉢脚部片。

5~11はいずれも埋土中から出土した土器片である。第22図5は称名寺I式深鉢口縁部片、第22図6は加曾利E4式深鉢脚部片、第22図7は称名寺II式深鉢口縁部片、第22図8~10は称名寺I式深鉢脚部片、第22図11・12は称名寺II式深鉢口縁部片である。

なお、これらの他、非掲載であるが、埋土中から繊粒輝石安山岩製の二次加工がある削片1点25.6g、その他

剥片4点147.5g、碟14点739.2gが出土している。

**所見** 用途や機能は不明である。確認面の標高は379.19~33m前後、底部の標高は378.84~89m前後である。しっかりとした掘方を有する。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭称名寺式期のもの  
と考えられる。

#### 4. 8号土坑(第23図、PL. 9・12)

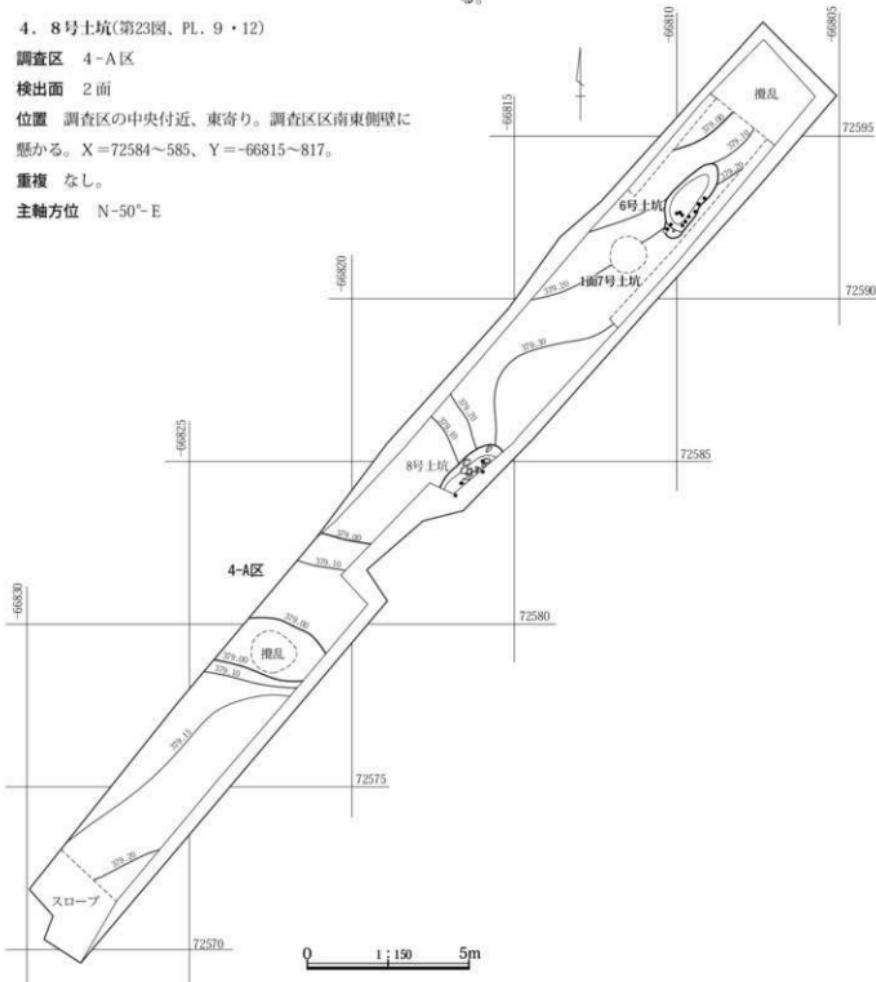
調査区 4-A 区

検出面 2面

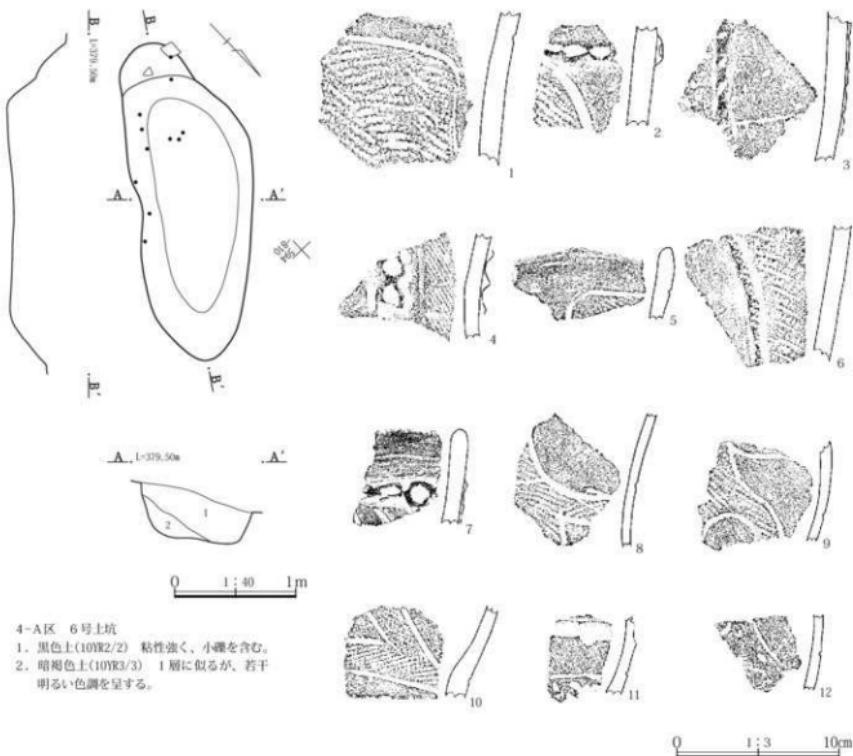
**位置** 調査区の中央付近、東寄り。調査区区南東側壁に懸かる。 $X = 72584 \sim 585$ 、 $Y = -66815 \sim 817$ 。

**重複** なし。

主轴方位 N-50°-E



第21図 4-A区2面全体図



第22図 4-A区2面6号土坑と出土遺物

**埋土** 締まり有る暗褐色土が主体、上層に小礫を含み、締まりが弱い黒褐色土が堆積している。

**遺物** 埋土及び底面から縄文時代中期後葉～後期前葉の土器片127点が出土した。中期後葉加曾利E2式土器片5点、同加曾利E3式土器片50点、同加曾利E4式土器片7点、中期後葉～後期前葉の土器片65点である。内、中期後葉の土器13点を図化・掲載した(1～13)。

1(第23図)は、南端、調査区東壁法面の底面から0.514m上の位置、標高379.364mから出土した加曾利E4式深鉢胴部片。

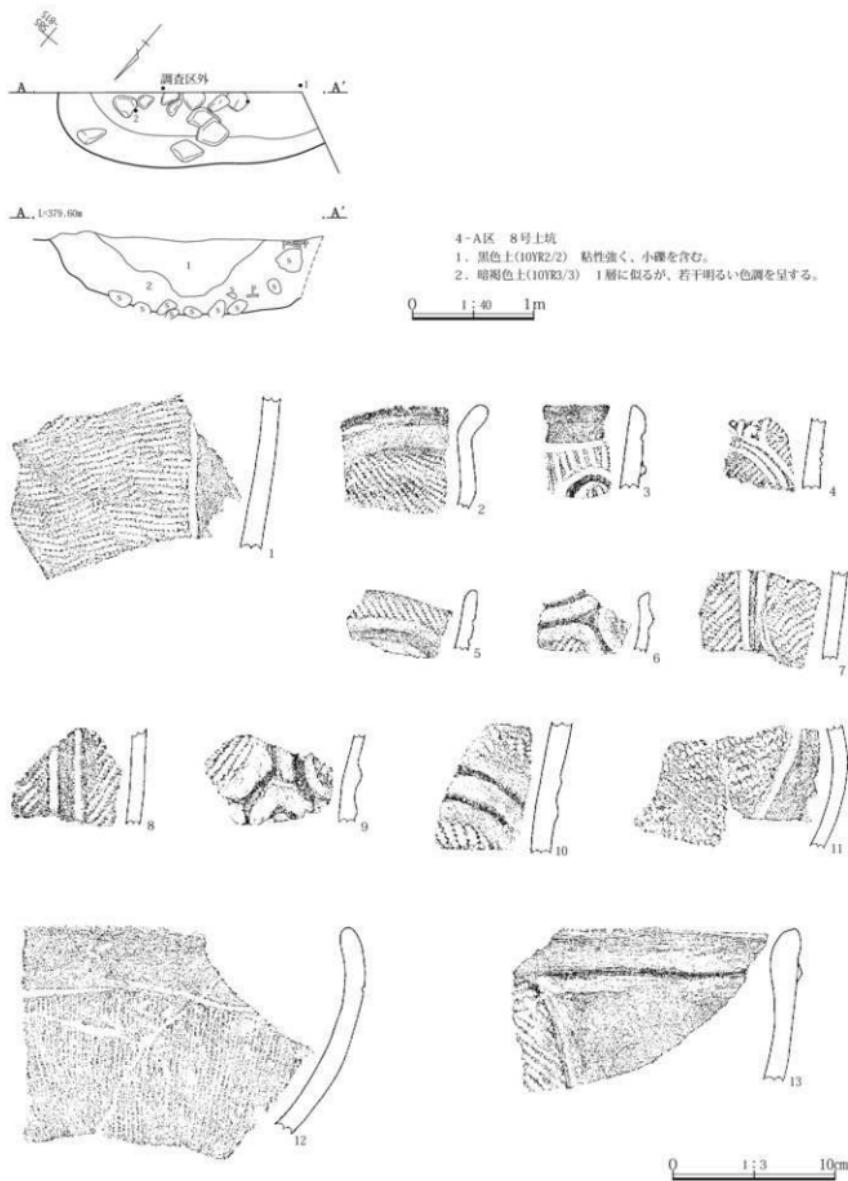
2(第23図)は、坑内北側の底面付近、底面から0.033m上の位置、標高378.927mから出土した加曾利E3式深鉢口縁部片。

3～13はいずれも埋土中から出土した。3(第23図)は加曾利E2式深鉢口縁部片、4(第23図)は加曾利E2式深鉢胴部片、5・6(第23図)は加曾利E3式深鉢口縁部片、7～11(第23図)は加曾利E3式深鉢胴部片、12・13(第23図)は加曾利E4式深鉢口縁部片である。

なお、これらの他、非掲載ではあるが、埋土中より剥片3点95.1g、碟5点161.8gが出土している。

**所見** 用途や機能は不明である。確認面の標高は379.04～35m前後、底部の標高は378.85～96m前後である。底面及び壁面には多くの自然縫貼りついている。深くしつかりとした掘方を有する。

**時期** 出土遺物から縄文時代中期後葉加曾利E3式期ないしE4式期のものと考えられる。



第23図 4-A区2面8号土坑と出土遺物

## 第4節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物について述べる。図化・掲載した遺構が出土の遺物は、いずれも縄文時代中期後葉～後期中葉の土器である。

なお、細かな調整や特徴等については、後掲の第4表遺物観察表に明示してあるので、詳細については参照されたい。

### 1. 遺構外出土縄文土器(第24・25図、PL.13・14)

遺構外出土遺物の内、縄文時代中期後葉～後期前葉の土器について述べる。1-B区、2区、3-A区、3-B区、4-A区から計695点出土した。その内、41点を図化・掲載した。なお、併せて、第3表出土遺構別縄文土器型式内訳表も参照されたい。

#### (1) 1-B区

1-B区からは中期後葉加曾利E 2式1点、同加曾利E 3式10点、中期後葉～後期前葉の土器片48点、計59点が出土した。図化・掲載したものはない。

#### (2) 2区

2区からは中期後葉加曾利E 3式4点、後期初頭称名寺3点、後期前葉堀之内1式6点、中期後葉～後期前葉の土器片36点、計49点が出土した。その内、2区1面出土のもの3点(第24図1～3)、2区2面出土のもの1点(第24図4)を図化・掲載した。

1～4(第24図)とも堀之内1式深鉢胴部片。

#### (3) 3-A区

3-A区からは中期後葉加曾利E 2式1点、同加曾利E 3式11点、同加曾利E 4式3点、後期初頭称名寺9点、後期前葉堀之内1式1点、同堀之内2式1点、中期後葉～後期前葉の土器片158点、計187点が出土した。その内、1面出土のもの1点(第24図5)、2面出土のもの7点(第24図6～12)を図化・掲載した。

5(第24図)は加曾利E 4式深鉢口縁部片、6・7(第24図)は加曾利E 3式深鉢で、6が胴部片、7が口縁部片である。8～10(第24図)は加曾利E 4式深鉢胴部片、11(第24図)は称名寺I式深鉢口縁部片、12(第24図)は称名寺II式深鉢胴部片である。

### (4) 3-B区

3-B区からは後期初頭称名寺3点、後期前葉堀之内2式1点、後期中葉加曾利B式3点、中期後葉～後期前葉の土器片20点、計27点が出土した。その内、2面出土のものの5点(13～17)を図化・掲載した。

13・14(第24図)は称名寺II式深鉢胴部片、15～17(第24図)は加曾利B 2式深鉢で、15のみが口縁部片、16・17が胴部片である。

#### (5) 4-A区

4-A区からは中期後葉加曾利E 2式4点、同加曾利E 3式13点、同加曾利E 4式7点、後期初頭称名寺15点、後期前葉堀之内1式7点、後期中葉加曾利B式4点、中期後葉～後期前葉の土器片323点の計373点が出土した。その内、4-A区2面出土のもの10点(第24図18～23、第25図24～27)、4-A区攪乱出土のもの14点(第25図28～41)を図化・掲載した。

2面出土の18～27では、18・19(第24図)は加曾利E 2式深鉢胴部片、20(第24図)は加曾利E 3式深鉢胴部片、21～23(第24図)は称名寺式深鉢片で、21・23が称名寺II式、22が称名寺I式、21・22が口縁部片、23が胴部片である。24・25(第25図)は加曾利B 2式深鉢胴部片、26(第25図)は後期前葉深鉢口縁部片、27(第25図)は中期後葉鉢口縁部片である。

攪乱出土の28～41では、28(第25図)は加曾利E 2式深鉢胴部片、29(第25図)は加曾利E 3式深鉢胴部片、30～33(第25図)は加曾利E 4式深鉢胴部片、34(第25図)は称名寺式深鉢口縁部突起、35～37(第25図)は称名寺II式深鉢で、35は口縁部片、36は胴部片、37は口縁部～胴部片である。38・39(第25図)は堀之内1式深鉢片で、38は頸部片、39は胴部片である。40・41(第25図)は加曾利B式深鉢片で、40は胴部片、41は口縁部片である。

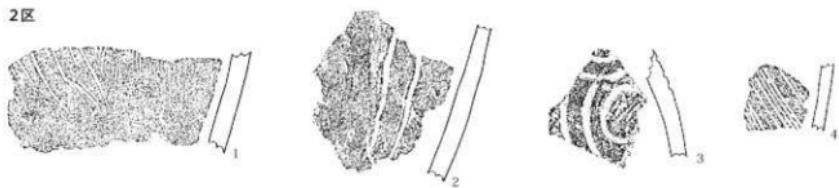
## 2. 縄文土器以外の遺構外出土非掲載遺物

遺構外出土遺物の内、縄文土器以外の中近世陶磁器・土器類・土師器・須恵器・石器・石製品には、図化・掲載したものはない。それら非掲載遺物の数量について、それぞれ述べる。なお、併せて、第4表縄文土器以外の非掲載遺物の点数と重量も参照されたい。

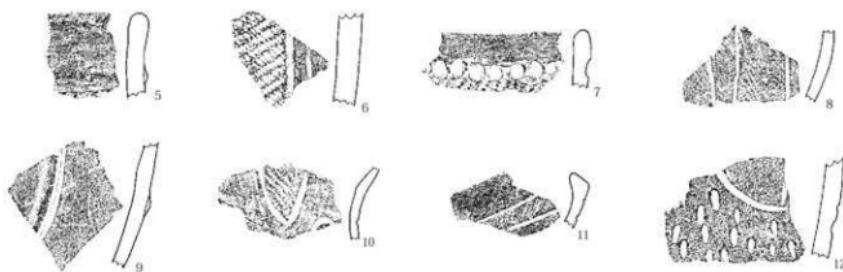
#### (1) 中近世陶磁器・土器類

遺構外から出土した近世・近代の土器・陶磁器類で非

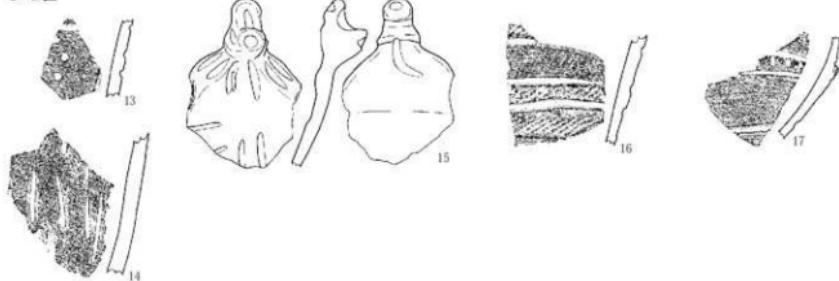
2区



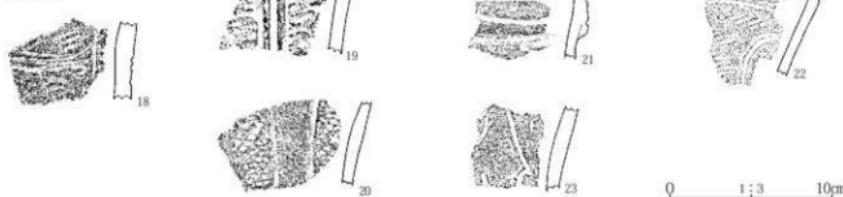
3-A区



3-B区

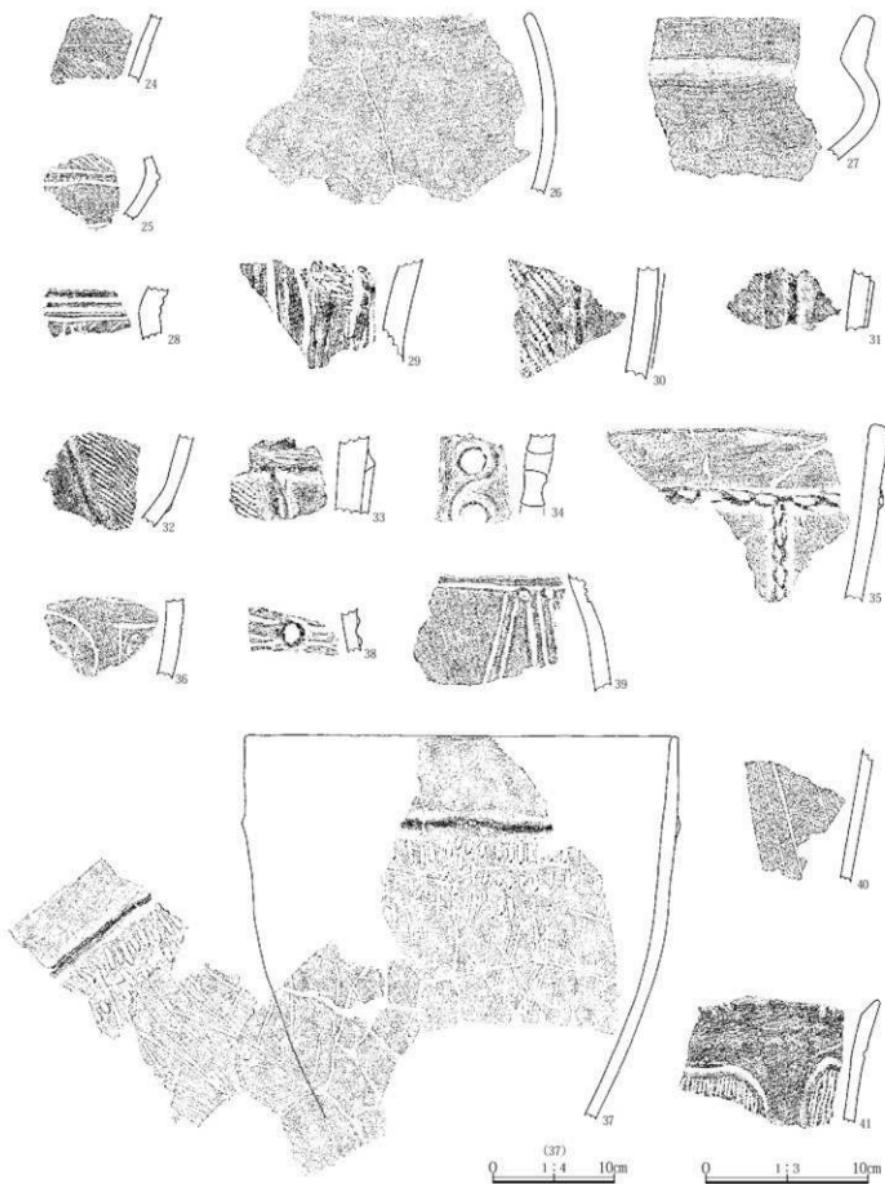


4-A区



0 1:3 10cm

第24図 遺構外出土繩文土器(1)



第25図 遺構外出土縄文土器(2)

掲載のものは、陶磁器類が計39点370.7g、土器・土製品類が23点867.3gである。3-A区のみ2面からの出土もあった。4-B区からの出土はなかった。

## (2) 土師器・須恵器類

遺構外から出土した土師器・須恵器類で非掲載のものは、土師器類が計67点521.8g、須恵器類が7点329.0gである。2区及び3-B区からの出土はなかった。3-A・

4-A区からは2面からの出土もあった。

出土調査区ごとの内訳は、

## (3) 石器・石製品類

遺構外から出土した石器・石製品類はで非掲載のものは、剥片28点758.9g、礫85点2414.3gである。1区、3-B区、4-B区からの出土はなかった。3-A区、4-A区では2面からの出土も見られた。

第3表 出土遺構別縄文土器型式内訳表

区	遺構No.	遺構種	加曾利E 2	加曾利E 3	加曾利E 4	称名寺	埴之内1	埴之内2	加曾利B	中崩後葉～後崩前葉	小計
3-A	4	土坑					3			2	5
3-A	5	土坑					1			5	6
4-A	6	土坑	1	5	11	13				62	92
4-A	7	土坑			1	2				23	26
4-A	8	土坑	5	50	7					65	127
1-B		遺構外	1	10						48	59
2		遺構外		4			3	6		36	49
3-A		遺構外	1	11	6	9	1	1		158	187
3-B		遺構外				3		1	3	20	27
4-A		遺構外	4	13	7	15	7		4	323	373
	合計		12	93	32	49	14	2	7	742	951

第4表 縄文土器以外の非掲載遺物の点数と重量

中崩砕器、他非掲載遺物一覧表

区	面	遺構名	陶磁器		土器・土製品		備考
			点数	重量(g)	点数	重量(g)	
1-B	1	2号土坑			1	3.3	土器
1-A	1	遺構外	2	13.7			
1-B	1	遺構外	1	18.4			
2	1	遺構外	6	32.4	3	51.9	土器
3-A	1	遺構外	9	166.3	3	33.0	土器
3-A	2	遺構外			2	25.2	土質
3-B	1	遺構外	1	2.6			
4-A	1	遺構外	20	137.3	15	757.2	土器・瓦、土質物
	計		39	370.7	24	870.6	

土師器・須恵器非掲載遺物一覧

区	面	遺構名	土師器		須恵器	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)
1-B	1	1号堅穴建物	9	51.1		
1-B	1	1号堅穴建物壇	6	177.0		
1-A	1	遺構外	3	42.8		
1-B	1	遺構外	5	40.8		
3-A	1	遺構外	24	78.4		
3-A	2	遺構外	7	79.2		
4-A	1	遺構外	26	197.6	3	140.5
4-A	2	遺構外	1	78.9	3	171.2
4-B	1	遺構外			1	17.3
	計		81	745.8	7	329.0

石器非掲載遺物一覧

区	面	遺構名	剥片		礫	
			点数	重量(g)	点数	重量(g)
1-B	1	1号堅穴建物	3	79.2	5	607.6
4-A	2	6号土坑	4	147.5	14	739.2
4-A	1	7号土坑			1	14.2
4-A	2	8号土坑	3	95.1	5	161.8
	2	1	遺構外		2	21.3
3-A	1	遺構外			4	45.4
3-A	2	遺構外	2	92.2	6	85.4
4-A	1	遺構外	14	323.6	33	625.9
4-A	2	遺構外			17	134.8
	計		28	758.9	85	2414.3

## 第4章 調査成果の整理とまとめ

先述した通り、本遺跡では、6世紀中葉に榛名山から噴出したHr-FP下面を1面、ローム漸移層を2面とした。

1面からは古墳時代後期、6世紀後半頃のものと考えられる遺構と中近世と考えられる遺構が、2面からは縄文時代中期後葉～後期初頭頃のものと考えられる遺構が検出された。1面で遺構が検出されたのは、1-A区、1-B区、2区、3-A区、4-A区、2面で遺構が検出されたのは3-A区と4-A区のみで、1-C区、3-B区、4-B区の3調査区では、1・2面いずれも遺構は検出されなかった。

なお、検出された遺構は、1面から6世紀後半頃の堅穴建物1棟、土坑3基、井戸1基、ピット4基、中近世の土坑1基、集石2基等、2面から縄文時代中期後葉頃の土坑1基と縄文時代後期初頭頃の土坑3基であった。

調査範囲内からは、弥生時代～古墳時代中期と、奈良・平安時代の遺構は発見されておらず、また、出土遺物にも弥生時代～古墳時代中期及び奈良時代のものは皆無であり、6世紀後半の堅穴建物の埋土中から平安時代後期の羽釜片が1点出土しているのみなので、調査範囲の近辺に、これらの時代の遺構が存在した可能性は低いものと考えられる。今回の調査範囲においては、これらの時代における土地利用の様態については、不明である。

調査された範囲全体として、遺構密度は極めて低く、仮に、本遺跡一带に集落の存在を想定するにしても、今回、発掘調査された部分においては、その縁辺に過ぎない状況にあると考えられる。

### 1. 中近世の遺構と遺物

**遺構** 中近世の遺構は、先述した通り、1-A区1面から土坑1基、2区及び3-A区の1面から集石遺構各1基、計2基が検出された。2区及び3-A区から検出された2基の集石遺構は、方形ないし梢円形状に埋め込まれた小礫の上面に大型礫が配置されていることから、石塔などの基部もしくは、建物の礎石である可能性が高いものと考えられるが、両者間は約27mも離れており、また、規則的に配置されていると言えるような状況は看取出来ず、用途・機能等についても一切不明である。

調査範囲が狭く、遺構数が少ないので、本遺跡における中近世の土地利用の在り方については不明な点が多いと言わざるを得ない。

**遺物** 中近世の遺物は図化掲載していない。遺構に伴う遺物は皆無であった。また、遺構から唯一出土した中近世の遺物は、1-B区1面から検出された2号土坑の埋土中から出土した中近世土器片1点であるが、この土坑は古墳時代後期のものと考えられており、埋没過程における混入と考えられる。

その他の中近世の陶磁器・土器類の出土は、すべて遺構外からの出土であり、陶磁器片が39点、土器・土製品が22点、他に3-A区から近代の土管片2点が出土している。

### 2. 古墳時代後期の遺構と遺物

先述した通り、本遺跡においてはこの時期の遺構が最も多く検出された。この時期の遺構は、1-A区、1-B区及び4-A区の1面から検出された。いずれもHr-FPを掘り込んでいる遺構である。

1-A区1面からは1号ピット、1-B区1面からは1号堅穴建物と2・3号土坑、2~4号ピット、4-A区からは1号井戸と7号土坑が検出された古墳時代後期の遺構は1-B区1面及び4-A区1面に集中していると言える。

1-B区で検出された1号堅穴建物は、本遺跡から検出された唯一の堅穴建物であり、注目されるが、調査区が限定されていたため、建物の全容は不明である上、残存状態も悪く、かつ遺物の出土も極めて少ない。

埋土中からは土製輪羽口片や鉄滓が出土しており、付近に鍛冶遺構が存在していた可能性が高い。なお、この堅穴建物の年代は、榛名二ツ岳軽石層を掘り込んで構築している堅穴建物であることや出土した土器器窓片と瓶片から6世紀後半代と考えられる。

また、1号井戸からも形態的には古墳時代後期、6世紀後半の年代観を有する土器器窓片が出土しているが、これまでに出土している同時代のものとは整形がやや異なり、例を見ない整形が施されている点が特徴的である。

土坑及びピットは1-B区から多く検出され、また、

本遺跡から検出された唯一の井戸である1号井戸は、調査範囲の北東側4-A区から検出された。ピットはいずれも径0.2m前後的小規模な穴であり、用途・機能は不明である。

本遺跡において、最も多くの遺構が検出された時期とはいえ、客観的に見れば検出された遺構数自体は少ない。調査範囲南端の1-A区から調査範囲北東側の4-A区に亘る総延長約157mの範囲に遺構が点在しているような状態で、かつ、竪穴建物は僅か1棟しか検出されず、それも不完全な状態での検出であり、中心となっているのは土坑及びピットと言った用途不明の小規模な遺構に過ぎない。古墳時代後期には、この地には集落的な景観が存在していたことは間違いないところであろうが、調査対象となったのは、決してその中心的な部分ではない。

さらに遺構外から出土した当該期の遺物出土量の少なさを勘案するならば、当該期の集落の本体は、本遺跡から離れているものと考えるのが妥当であろう。

### 3. 繩文・弥生時代の遺構と遺物

**遺構** 繩文時代の遺構はローム漸移層である2面から検出された。先述した通り、2面から遺構が検出されたのは、3-A区と4-A区の2調査区のみである。

繩文時代の遺構として検出されたのは土坑4基である。3-A区から4・5号土坑の2基、4-A区から6・8号土坑の2基が検出された。

3-A区から検出された繩文時代の土坑は径約1m程度と小型で、円形状を呈し、掘方も浅い。4-A区から検出された繩文時代の土坑は、楕円形状を呈し、深く、しっかりととした掘方を有している。いずれの土坑も、出土遺物等から繩文時代中期後葉～後期初頭頃のものと考えられる。

**遺物** 調査区全体において、Hr-PP下の黒色土からローム漸移層にかけて、繩文時代中期後葉～後期前葉の土器片が、非掲載のものを含んで計951点出土した。なお、1面から検出された繩文時代以外の遺構や表土、2面の遺構が検出されなかった1-B区、2区、3-B区からも繩文時代中期後葉～後期前葉の土器片が出土している。その一方で、明らかに繩文時代のものと考えられる石器・石製品の出土は少なかった。

本遺跡から出土した繩文時代中期後葉～後期前葉の土

器の最古の事例は、僅かながらではあるが中期後葉加曾利E2式のものが12点ほどある。加曾利E3式～称名寺式が主体で、加曾利E3式が93点、同E4式が32点、称名寺式が49点である。その後、少量ながら堀之内1式～加曾利B2式ものが含まれる。堀之内1式14点、堀之内2式2点、加曾利B式7点である。

これらの他は、小破片の縄文施文、無文土器が大半を占め、細かな時期比定ができないため中期後葉～後期前葉として一括した。これらは742点ある。本遺跡出土の縄文土器は、概ね、加曾利E2～加曾利B2式間に比定出来るものである。

### まとめ

本遺跡においては狭小な範囲における調査であったことや、検出された遺構の種類や数が多くなかったため、あまり多くのことを明らかにすることが出来たとは言い難い。

先述したように、中近世の遺構・遺物の検出・出土量はいずれも僅少であるため、その時期のこの地における土地利用の在り方については不明な点が多い。

古墳時代後期は、竪穴建物が検出されてはいるものの僅か1棟であり、また、その他の遺構も、井戸1基と土坑3基及びピット4基という僅少さで、当該期の遺物量も決して多いわけではない。

僅か1棟・1基とは言え、竪穴建物や井戸が検出されていることからみれば、人々の生活が営まれた集落の1角を振り当てたと言いたいが、幅が狭いとは言え、総延長約180mに及ぶ範囲の中で、竪穴建物1基、井戸1基、土坑3基、ピット4基という遺構の検出状況から見れば、集落の縁辺のごく一部が辛うじて検出されたと見るべきで、集落の本体は本遺跡地の外側に想定する必要があるだろう。

繩文時代については、検出された遺構数は少なく、竪穴建物は1棟も検出されてはいないものの、出土した土器がが繩文時代中期後葉から後期前葉の時期に限られていることや、遺構外からの出土を含めた遺物の数量から見ても、調査対象地の近隣に当該期の集落が展開していた可能性が高いものと考えられる。この点においても、古墳時代後期と同様、「集落の縁辺部」が検出されたとの所見は共通するのではないだろうか。

## 遺物觀察表

第5表 遺物觀察表

## 1-B区1面1号堅穴建物

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第12回 PL.11	1 鉄 鍛津	職便口前東側、 床面より 0.138m上、 標高378.541m。 一部残存	縦 幅 6.9 7.8 厚 重 258.3	灰褐色	津波は密。上面に渦動性が見られ、下面は凹凸が確認される。側面がなめらかに削れている。	時期不明
第12回 PL.11	2 頭櫛器 羽釜	竈埋上 羽釜口		織砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/灰黃褐色	クロロ整形、回転は右回りか。筒は貼付。口唇部端部は平	平安時代後期
第12回 PL.11	3 上製品 輪羽口	竈埋上 輪羽口		織砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	筒状のものに粘土を巻き付け整形か。外面は黒褐色にガラス質化している。先端付近の外径は6.0cm前後を測る。	時期不明
第12回 PL.11	4 縄文土器 深鉢	竈埋上 剥部破片		粗砂・白色土、輝 石/良好	沈縄による懸垂文を施し、R L 縄文を縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第12回 PL.11	5 縄文土器 深鉢	竈埋上 剥部破片		粗砂/良好	隣帶による口縁部凹凸、沈縄による剥部懸垂文を施し、加曾利E 3式	R L 縄文を縦位充填施文する。
第12回 PL.11	6 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		粗砂/普通	沈縄による懸垂文を施し、R L 縄文を縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第12回 PL.11	7 石器 打製石斧	理上 一部欠損	長 (6.5) 幅 4.4 厚 1.2 重 32.7	黑色頁岩	完成状態。刃部再生時に上部剥を欠損したことにより石斧を複数。背面刃部中央から左辺にかけて刃部再生され、摩耗痕を欠いているが、背面側右側縁および裏面側刃部には摩耗痕が残る。短形把。	縄文時代
第12回 PL.11	8 石製品 砥石?	理上 一部欠損	長 (9.1) 幅 8.9 厚 4.1 重 582.3	粗粒輝石安山岩	掌大の横円彫を用いたもので、背面に顯著な摩耗痕が広がる。摩耗痕は2ヶ所にあり、右辺摩耗痕は目が潰れほど濃く使い込んでおり、砥石としての可能性を考えておきたい。	時期不明

## 4-A区1面7号土坑

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第15回 PL.11	1 上製品 土製円盤	理上 1/2	幅 3.4	織砂・輝石/良好	称名寺II式の剥部片を再利用。縁辺の摩滅は認められないが、細かく形を整えている。	称名寺II式
第15回 PL.11	2 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		織砂・輝石/良好	縦位、斜位の帯状沈縄を施し、L R 縄文を充填施文する。	称名寺I式

## 4-A区1面1号戸戸

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第16回 PL.11	1 土師器 甕	理上上層、確認 可能から約2m程 下。	口 幅 17.3 16.2	織砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口唇部は横擴で、胸部は削割り後、剥部中位から口縁部にかけて縦・横方向の笠撫で。内面は剥部下位と中位が斜め、上位から口縁部は横方向の笠撫で。	6世紀後半
第16回 PL.11	2 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		粗砂・輝石/良好	隣帶による口縁部凹凸、R L 縄文を施す。	加曾利E 3式
第16回 PL.11	3 縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂・輝石、石英/ 良好	口縁部に押捺縄を施す。	称名寺II式
第16回 PL.11	4 縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂・石英/良好	口縁部に押捺縄をめぐらし、以下、沈縄を垂下させる。	称名寺II式
第16回 PL.11	5 縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂・輝石/ふつ う	豊饒玉の形容で口縁が刄く外屈。円形剣突を施し、これを基点に弧状の沈縄を施す。L R 縄文を充填施文する。無文部、内面磨き面。	加曾利B 2式
第16回 PL.11	6 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		粗砂・輝石、石英/ 良好	帯状沈縄によるU字状モチーフを施す。	称名寺II式
第16回 PL.11	7 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		粗砂・輝石、石英/ 良好	弧状の帯状沈縄を垂下させる。	称名寺II式

## 3-A区2面4号土坑

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第19回 PL.11	1 縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂・輝石、石英/ 良好	口縁部に剣突を伴う隆帯を逆T字状に施し、以下、条縄を斜格子状に施す。	称名寺式

## 3-A区2面5号土坑

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第20回 PL.11	1 縄文土器 深鉢	理上 剥部破片		粗砂/良好	帶状沈縄による幾何学モチーフを施し、R L 縄文を充填施文する。	称名寺I式

## 4-A区2面6号土坑

種 因 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 事	計測値	胎土/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第22回 PL.12	1 縄文土器 深鉢	底面直上、 標高379.194m 剥部破片		粗砂・輝石、石英/ 良好	沈縄による逆U字状文を施し、L R 縄文を充填施文する。	加曾利E 4式
第22回 PL.12	2 縄文土器 深鉢	底面から 0.151m上、 標高379.221m 剥部破片		粗砂・石英/良好	剣突を伴う隆帯を横位にめぐらし、以下、弧状に沈縄を垂下。L R 縄文を充填施文する。	称名寺I式

掃 因 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第228# PL.12	3	縄文土器 深鉢	底面直上、 標高379.199mm 胴部破片		粗砂、石英/良好	斜位の刺突を施した縦帶を垂下させる。	称名寺式
第228# PL.12	4	縄文土器 深鉢	底面直上、 標高379.025mm 胴部破片		粗砂、輝石/良好	押捺縦帯、沈線を垂下させ、L.R.縄文を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	5	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂、粗砂/良好	小波状口縁。沈線による弧状モチーフを施し、L.R.縄文を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	6	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /ふつう	弧状の隆線を施し、異業のL.R.縄文を縱位充填施文する。	加曾利E 4式
第228# PL.12	7	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂/良好	口縁部に刺突を作り隆線をめぐらし、さらに垂下させるようだ。交点に円形貼付文を付す。区画内に帯状沈線を施す。	称名寺式
第228# PL.12	8	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、赤色粒、輝 石/良好	帶状沈線による幾何学モチーフを施し、L.R.縄文を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	9	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、赤色粒、輝 石、石英/良好	帶状沈線による幾何学モチーフを施し、L.R.縄文を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	10	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	帶状沈線による幾何学モチーフを施し、L.R.縄文を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	11	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石/良好	横位帶状沈線を施し、列点を充填施文する。	称名寺式
第228# PL.12	12	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /ふつう	帶状沈線による幾何学モチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺式

## 4-A区2面8号土坑

掃 因 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第238# PL.12	1	縄文土器 深鉢	底面から 0.514m上、 標高378.927mm 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	沈線による懸垂文を施し、L.R.縄文を充填施文する。	加曾利E 4式
第238# PL.12	2	縄文土器 深鉢	底面から 0.033m上、 標高379.364mm 口縁部破片		粗砂/ふつう	口縁部横円状区画を施し、R.L.縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	3	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂、輝石/ふつ う	横位沈線をめぐらして横抜き無文帯を区画、弧状隆 帶を施し、縦位短沈線を充填施文する。	加曾利E 2式
第238# PL.12	4	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂/良好	R.L.縄文を地文とし、弧状、無手状沈線を施す。	加曾利E 2式
第238# PL.12	5	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂/良好	波状口縁。口縁に沿って2条沈線を施し、口縁下にR.L.縄 文を充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	6	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂/良好	波状口縁。隆線による円状文などのモチーフを施し、R.L. 縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	7	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石/ふつ う	沈線による懸垂文を施し、R.L.縄文を縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	8	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石/良好	2条隆線による懸垂文、円状文を施し、R.L.縄文を充填施 文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	9	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	弧状の2条隆線を施し、R.L.縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	10	縄文土器 深鉢	理上 胴部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	弧状の2条沈線を施し、R.L.縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第238# PL.12	11	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂/ふつう	口縁部に横位沈線をめぐらし、以下、縦位条線を全面施 文する。	加曾利E 4式
第238# PL.12	12	縄文土器 深鉢	理上 口縁部破片		粗砂、輝石/良好	口縁部に横位隆線をめぐらし、以下、弧状に隆線を垂下、 L.R.縄文を充填施文する。	加曾利E 4式
第238# PL.12	13	縄文土器 深鉢	1面 胴部破片		粗砂、輝石/良好	集合沈線による懸垂文を施し、L.R.縄文を充填施文する。 縦之内1式	

## 2区遺構外出土縄文土器

掃 因 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第248# PL.13	1	縄文土器 深鉢	1面 胴部破片		粗砂、細縫、輝石、 石英/良好	斜行する沈線を施す。	縦之内1式
第248# PL.13	2	縄文土器 深鉢	1面 胴部破片		粗砂、輝石/ふつ う	横位、円状の沈線を施し、L.R.縄文を充填施文する。	縦之内1式
第248# PL.13	3	縄文土器 深鉢	2面 胴部破片		粗砂、石英/良好	斜行する集合沈線を施す。	縦之内1式
第248# PL.13	4	縄文土器 深鉢	1面 口縁部破片		粗砂、石英/良好	口縁部に横位縫隙を埋らす。	加曾利E 4式

## 3-A区遺構外出土縄文土器

掃 因 PL.No	No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石 材・素 材 等	成 形・整 形 の 特 徴	備 考
第248# PL.13	5	縄文土器 深鉢	2面 胴部破片		粗砂/良好	沈線による懸垂文を施し、R.L.縄文を縦位充填施文する。	加曾利E 3式
第248# PL.13	6	縄文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂/良好	口縁部に押捺文を廻らし、以下、R.L.縄文を充填施文する。	加曾利E 3式
第248# PL.13	7	縄文土器 深鉢	2面 胴部破片		粗砂/良好	縦位帶状沈線を施し、L.R.縄文を充填施文する。	加曾利E 4式

## 遺物觀察表

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第248# PL.13	8 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/ふつ う	弧状の隆線を施す。	加曾利E 4式
第248# PL.13	9 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂/ふつう	U字状の沈線を施し、LR繩文を充填施文する。	加曾利E 4式
第248# PL.13	10 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石/ふつ う	波状口縁で口縁が短く内屈。帯状沈線を施し、LR繩文を称名寺1式	
第248# PL.13	11 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石/ふつ う	波状口縁で口縁が短く内屈。帯状沈線を施し、LR繩文を称名寺1式	
第248# PL.13	12 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	沈線による弧状モチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺1式

## 3-B区遺構外出土罐文土器

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第248# PL.13	13 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	沈線によるモチーフを施し、列点を充填施文する。	称名寺1式
第248# PL.13	14 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石、石英 /ふつう	列点を施す。	称名寺1式
第248# PL.13	15 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石、石英 /ふつう	波状口縁で波頂部に突起を付す。円形刺突、短沈線を施す。 内面にも三日月状の沈線を施文。	加曾利B 2式
第248# PL.13	16 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/良好	横位帯繩文LRを施す。	加曾利B 2式
第248# PL.13	17 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/ふつ う	隣帶を貼付して段を形成、刺みを施し、下至上に沈線をめぐらす。下位にも沈線を施文。	加曾利B 2式

## 4-A区遺構外出土罐文土器

種 国 PL.No	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値	胎上/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
第248# PL.13	18 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/良好	R L繩文を地文とし、沈線による懸垂文、横位孤状、藏手	加曾利E 2式
第248# PL.13	19 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	R L繩文を地文とし、沈線による懸垂文を施す。加曾利E 2式	加曾利E 2式
第248# PL.13	20 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/ふつ う	沈線による懸垂文を施し、複節R L Rを縱位充填施文する。加曾利E 3式	
第248# PL.13	21 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	肥厚口縁。肥厚部に横幅円状沈線を施す。口唇部に刺突を施す。加名寺1式	
第248# PL.13	22 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	口縁内面肥厚。波状沈線による弧状モチーフを施し、LR繩文を称名寺1式	
第248# PL.13	23 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/良好	横位沈線による丁字状モチーフを施し、列点を充填施文する。称名寺1式	
第258# PL.14	24 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/良好	横位沈線、斜線文を施す。無文部、内面磨き整形。	加曾利B 2式
第258# PL.14	25 瓢文土器 深鉢	2面 側部破片		粗砂、輝石/ふつ う	くの字状に内屈。肩曲部に条の横位沈線を廻らし、上位に斜継文を施す。内面磨き整形。	加曾利B 2式
第258# PL.14	26 瓢文土器 深鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	無文。肩部が膨らみ、口縁が短く内湾する。	後期前葉
第258# PL.14	27 瓢文土器 鉢	2面 口縁部破片		粗砂、輝石/ふつ う	無文。肩部が膨らみ、口縁がくの字状に外屈する。	中期後葉
第258# PL.14	28 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、輝石/良好	R L繩文を地文とし、横位沈線、懸垂文を施す。加曾利E 2式	
第258# PL.14	29 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂/ふつう	沈線による懸垂文を施し、無節L rを縦位充填施文、蛇行懸垂文を施す。	加曾利E 3式
第258# PL.14	30 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、赤色粒、輝 石、石英/良好	沈線による懸垂文を施し、L R繩文を縦位充填施文する。加曾利E 4式	
第258# PL.14	31 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂/良好	隣線による懸垂文を施し、条線を充填施文する。加曾利E 4式	
第258# PL.14	32 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、輝石/良好	弧状の隣線を施し、L R繩文を充填施文する。加曾利E 4式	
第258# PL.14	33 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂/良好	横位隣線をめぐらし、さらに隣線を重ねて、LR繩文を縦位充填施文する。加曾利E 4式	
第258# PL.14	34 瓢文土器 深鉢	縫合内 口縁部突起		粗砂/良好	円孔を上に配し、逆S字状に沈線を治わせる。称名寺1式	
第258# PL.14	35 瓢文土器 深鉢	縫合内 口縁部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	口縁部に刺突を作らう隣帶をめぐらし、以下、同様の隣帶を垂下させる。	称名寺1式
第258# PL.14	36 瓢文土器 深鉢	1井戸/埋土 側部破片		粗砂、輝石、石英 /良好	帶状沈線による矩形、弧状モチーフを施し、列点を充填施文する。称名寺1式	
第258# PL.14	37 瓢文土器 深鉢	縫合内 口縁~側部破片	口 (35.0)	粗砂、輝石/良好	口縁部に隣帶をめぐらし、隣帶下に列点、懸垂文を施す。称名寺1式	
第258# PL.14	38 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、輝石/良好	横位沈線、円形貼付文を施す。	瓶之内1式
第258# PL.14	39 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、輝石/ふつ う	肩曲部に横位沈線をめぐらし、以下、懸垂文を施す。交点に円形刺突を施す。	瓶之内1式
第258# PL.14	40 瓢文土器 深鉢	縫合内 側部破片		粗砂、輝石、石英 /ふつう	斜行する沈線を施す。	加曾利B 2式
第258# PL.14	41 瓢文土器 深鉢	縫合内 口縁部破片		粗砂、輝石/良好	小波状口縁。無文文を縦位施文し、横円状沈線で画す。加曾利B 2式	

# 写 真 図 版





1.調査区の路線周辺(北東から)



2.調査区の路線周辺(南から)



1 . 1-A 区 1 面 調査区全景(北から)



2 . 1-A 区 1 面 1 号土坑全景(西から)



3 . 1-A 区 1 面 1 号土坑断面(西から)



4 . 2 区 1 面 調査区全景(南西から)



5 . 2 区 1 面 1 号集石全景(南から)



6 . 2 区 1 面 1 号集石全景(東から)



1. 3-A区1面調査区全景(北東から)



2. 3-A区1面2号集石全景(南東から)



3. 3-A区1面2号集石掘方全景(南東から)



4. 3-A区1面2号集石断面(南東から)



1 . 1-B 区 1 面調査区全景(北から)



2 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物全景(北西から)



3 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物 A-A' 断面(西から)



4 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物 罹全景(北西から)



5 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物 罹掘方全景(北西から)



6 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物 罹 B-B' 断面(西から)



7 . 1-B 区 1 面 1 号竪穴建物 罹 C-C' 断面(北西から)



1. 1-B区1面2号土坑全景(東から)



2. 1-B区1面3号土坑全景(東から)



3. 4-A区1面調査区全景(北東から)



4. 4-A区1面7号土坑全景(南から)



5. 4-A区1面7号土坑断面(北東から)



1 . 4-A 区 1 面 1 号井戸全景(南東から)



2 . 4-A 区 1 面 1 号井戸断面(北東から)



3 . 1-A 区 1 面 1 号ビット全景(西から)



4 . 1-B 区 1 面 2 ~ 4 号ビット全景(北東から)



5 . 1-B 区 1 面 2 号ビット全景(北東から)



6 . 1-B 区 1 面 2 号ビット断面(北東から)



7 . 1-B 区 1 面 3 号ビット全景(北東から)



8 . 1-B 区 1 面 3 号ビット断面(北東から)



1. 1-B区1面4号ピット全景(北東から)



2. 1-B区1面4号ピット断面(北東から)



3. 1-C区1面調査区全景(南から)



4. 3-B区1面調査区全景(北東から)



5. 3-A区2面調査区全景(北東から)



1. 3-A区2面調査区南西部(南西から)



2. 3-A区2面4号土坑全景(南東から)



3. 3-A区2面4号土坑断面(南東から)



4. 3-A区2面5号土坑全景(南東から)



5. 3-A区2面5号土坑断面(南東から)



1. 4-A区2面調査区全景(南西から)



2. 4-A区2面6号土坑全景(南西から)



3. 4-A区2面6号土坑断面(南西から)



4. 4-A区2面8号土坑全景(北から)



1 . 2区 2面調査区全景(北東から)



2 . 3-B区 2面調査区全景(北東から)



3 . 4-B区 2面調査区全景(南東から)



4 . 1-A区 基本土層(西から)



5 . 1-C区 基本土層(北から)



6 . 2区 基本土層(東から)



7 . 3-B区 基本土層(南東から)



8 . 4-A区 基本土層(南東から)

1 - B区1号竖穴建物



4 - A区1面7号土坑



4 - A区1面1号井戸



3 - A区2面4号土坑

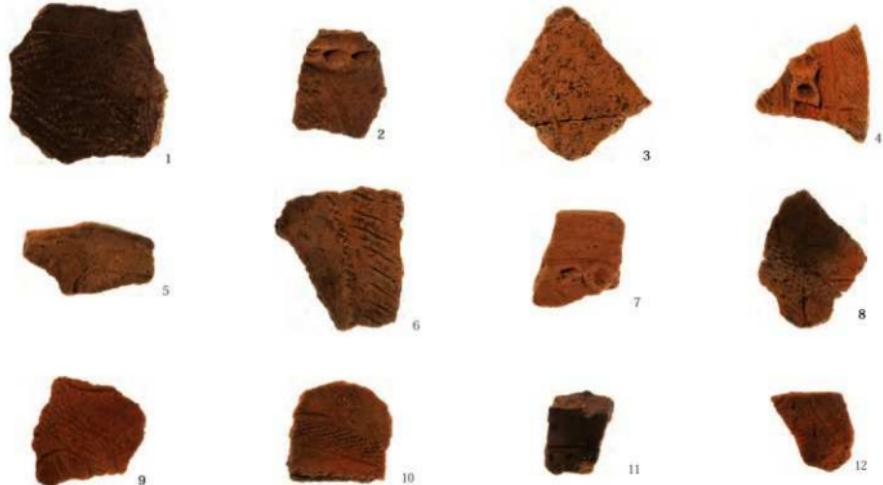


3 - A区2面5号土坑



# PL.12

4-A区2面6号土坑



4-A区2面8号土坑



## 遺構外出土蟠文土器

2区



1



2



3



4

## 3-A区



5



6



7



8



9



10



11



12

## 3-B区



13



15



16



14



17

## 4-A区



18



19



21



22



20



23

PL.14



24



26



27



25



28



29



30



31



32



33



34



35



36



38



39



37



40



41

# 報告書抄録

書名ふりがな	かいのせほりのうちいせき
書名	貝野瀬堀ノ内遺跡
副書名	(一)沼田赤城線(貝野瀬工区)歩道整備社会資本総合整備(防災・安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	-
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	710
編著者名	高島英之
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20220812
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かいのせほりのうちいせき
遺跡名	貝野瀬堀ノ内遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんとねぐんしょうわむらおおあざかいのせあざほりのうち
遺跡所在地	群馬県利根郡昭和村大字貝野瀬字堀ノ内
市町村コード	10448
遺跡番号	0049
北緯(世界測地系)	36.651169
東経(世界測地系)	139.085498
調査期間	20210701-20210731
調査面積	787.33
調査原因	道路建設
種別	宅地
主な時代	中近世、古墳時代、縄文時代
遺跡概要	中近世-土坑1+集石遺構2+古墳時代-竪穴建物1+土坑3+井戸1+ピット4+土師器+縄文時代-土坑4+縄文土器
特記事項	これまでの類例がない技法で製作された井戸出土の古墳時代後期の土師器甕
要約	<p>本遺跡は、片品川左岸の低位段丘面上に位置し、標高383mで、片品川との比高は30mほどある。調査は、Hr-FP(6世紀中頃に榛名火山から噴出した軽石)下面を1面目、ローム漸移層を2面目として遺構確認を行い、1面から中近世の土坑1基と集石遺構2基、古墳時代後期の竪穴建物1棟、土坑3基、井戸1基、ピット4基、縄文時代中期後葉～後期前葉の土坑4基などの遺構が検出された。</p> <p>中近世の集石遺構2基は、石塔などの基部もしくは、建物の礎石の可能性が想定出来る。古墳時代後期の竪穴建物は、Hr-FPの一次堆積層を掘りこんでいる。甕は、両側の袖石が良く遺っていた。調査区の範囲が限られていたため、建物の規模は不明である。埋土中からの遺物の出土は極めて少なかった。竪穴建物以外では、土坑3基と井戸1基、ピット4基が検出された。井戸埋土中からは、底部を欠損するものの残存状態が良好な小型甕が出土した。今まで出土した同年代のものと整形がや異なり、例をみない整形が施されている点が注目される。</p> <p>また、調査区全体において、Hr-FP下の黒色土からローム漸移層にかけて、縄文時代中期～後期の土器片が多数出土した。縄文時代の遺構は土坑4基である。土坑の殆どは直径1m程度の円形で、縄文時代中期～後期のものである。</p>

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第710集

## 貝野瀬堀ノ内遺跡

(一)沼田市城原(貝野瀬ノ内)歩道整備社会資本総合整備  
(防災・安全)事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

令和4(2022)年8月10日印刷

令和4(2022)年8月12日発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県邑楽郡大泉町下沼田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaiban.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社

---